

# 生まれいずる悩み

有島武郎

青空文庫



私は自分の仕事を神聖なものにしようとしていた。ねじ曲がろうとする自分の心をひっぱたいて、できるだけ伸び伸びしたまっすぐな明るい世界に出て、そこに自分の芸術の宮殿を築き上げようともがいていた。それは私にとってどれほど喜ばしい事だったろう。と同時にどれほど苦しい事だったろう。私の心の奥底には確かに——すべての人の心の奥底にあるのと同様な——火が燃えてはいたけれども、その火を燻いぶらそうとする塵ちりあくた芥あぐたの堆たい積せきはまたひどいものだった。かきのけてもかきのけても容易に火の燃

え立つて来ないような瞬間には私はみじめだった。私は、机の向こうに開かれた窓から、冬が来て雪にうずもれて行く一面の畑を見渡しながら、滞りがちな筆をしっかりとつけしかりつけ運ばそうとしていた。

寒い。原稿紙の手ざわりは氷のようだった。

陽はひずんずん暮れて行くのだった。灰色からねずみ色に、ねずみ色から墨色にぼかされた大きな紙を目の前にかけて、上から下へと一気に視線を落として行く時に感ずるような速さで、昼の光は夜の闇やみに変わって行くこうとしていた。午後になったと思うまもなく、どんどん暮れかかる北海道の冬を知らないものには、日がいち早く蝕むしばまれるこの気味悪いさびしさは想像がつくまい。ニセ

コアンの丘陵の裂け目からまつしぐらにこの高原の畑地を目がけて吹きおろして来る風は、割合に粒の大きいかる軽やかな初冬の雪片を[あおり立て](#)あおり立て横ぎまに舞い飛ばした。雪片は暮れ残つた光の迷子まいごのように、ちかちかした印象を見る人の目に与えながら、いたずら者らしくさんざん飛び回つた元氣にも似ず、降りたまつた積雪の上に落ちるや否や、寒い薄紫の死を死んでしまふ。ただ窓に来てあたる雪片だけがさらさらさらさらとささやかに音を立てるばかりで、他のすべてのやつらは残らず唾おしだ。快活らしい白い唾の群れの舞踏——それは見る人を涙ぐませる。

私はさびしさのあまり筆をとめて窓の外をながめてみた。そして君の事を思った。

## 二

私が君に始めて会ったのは、私がまだ札幌さっぽろに住んでいるころだった。私の借りた家は札幌の町はずれを流れる豊平川とよひらがわという川の右岸にあった。その家は堤の下の一町歩ほどもある大きなりんご園の中に建ててあった。

そこにある日の午後君は尋ねて来たのだった。君は少しふきげんそうな、口の重い、癩かんで背だけが伸び切らないといったような少年だった。きたない中学校の制服の立て襟えりのホックをうるさそうにはずしたままにしていた、それが妙な事にはことにはつきり

と私の記憶に残っている。

君は座につくとぶつきらぼうに自分のかいた絵を見てもらいたいと言ひ出した。君は片手ではかかえ切れないほど油絵や水彩画を持ちこんで来ていた。君は自分自身を平気で虐しいたげる人のように、ふろしき包みの中から乱暴に幾枚かの絵を引き抜いて私の前に置いた。そしてじつと探るように私の顔を見つめた。明あからさまに言うと、その時私は君をいやに高慢ちきな若者だと思つた。そして君のほうには顔も向けなくて、よんどころなくさし出された絵を取り上げて見た。

私は一目見て驚かすにはいられなかつた。少しの修練も経ては  
いないし幼稚な技巧ではあつたけれども、その中には不思議に力

がこもつていてそれがすぐ私を襲ったからだ。私は画面から目を放してもう一度君を見直さないではいられなくなった。で、そうした。その時、君は不安らしいそのくせ意地っぱりな目つきをして、やはり私を見続けていた。

「どうぞでしょう。それなんかはくだらない出来だけども」

そう君はいかにも自分の仕事を軽蔑けいべつするように言った。もう

一度明らさまに言うが、私は一方で君の絵に喜ばしい驚きを感じながらも、いかにも思いあがったような君の物腰には一種の反感を覚えて、ちよつと皮肉でも言ってみたくなった。「くだらない出来がこれほどなら、会心の作というのはたいしたものでしょうね」とかなんとか。

しかし私は幸いにもとつきにそんな言葉で自分を穢けがすことをのがれたのだった。それは私の心が美しかったからではない。君の絵がなんといつても君自身に対する私の反感に打ち勝つて私に迫っていたからだ。

君がその時持つて来た絵の中で今でも私の心の底にまざまざと残っている一枚がある。それは八号の風景にかかれたもので、軽かるがわ

川あたりの泥炭地でいたんちを写したと覚しい晩秋の風景画だった。荒

涼と見渡す限りに連なつた地平線の低い葦原あしはらを一面におおうた

みぞれぐも

雲雲のすきまから午後の日がかすかに漏れて、それが、草の

中からたつた二本ひよろひよると生おい伸びた白樺しらかばの白い樹皮を

力弱く照らしていた。単色を含んで来た筆の穂が不器用に画布に

たたきつけられて、そのままけし飛んだような手荒な筆触で、自然の中には決して存在しないと言われる純白の色さえ他の色と練り合わされずに、そのままべとりとなすり付けてあったりしたが、それでもじつと見ていると、そこには作者の鋭敏な色感が存分にかがわれた。そればかりか、その絵が与える全体の効果にもしつかりとまとまった気分が行き渡っていた。悒鬱ゆううつ——十六七の少年にははぐく嘔めそうもない重い悒鬱を、見る者はすぐ感ずる事ができた。

「たいへんいいじやありませんか」

絵に対してすなお素直になつた私の心は、私にこう言わさないではおかなかつた。

それを聞くと君は心持ち顔を赤くした——と私は思った。すぐ次の瞬間に來ると、君はしかし私を疑うような、自分を冷あざわら笑うような冷やかな表情をして、しばらくの間私と絵とを等分に見くらべていたが、ふいと庭のほうへ顔をそむけてしまった。それは人をばかにした仕打ちとも思えば思われぬ事はなかった。二人は氣まずく黙りこくってしまった。私は所在なさに黙ったまま絵をながめつづけていた。

「そいつはどこん所が悪いんです」

突然また君の無愛想な声が出た。私は今までの妙にちぐはぐになつた気分から、ちよつと自分の意見をずばずばと言ひ出す氣にはなれないでいた。しかし改めて君の顔を見ると、言わさないじ

やおかないぞといったような真剣さが現われていた。少しでもまに合わせを言おうものならけいべつ軽蔑してやるぞといったような鋭さが見えた。よし、それじゃ存分に言つてやろうと私もとうとうほんとうに腰をすえてかかるようにされていた。

その時私が口に任せてどんな生意氣を言つたかは幸いな事に今はおおかた忘れてしまつてゐる。しかしとにかく悪口としては技巧が非常にあぶなつかしい事、自然の見方が不親切な事、モテイヴがたんじょうてき耽情的過ぎる事などをならべたに違いない。君は黙つたまままじまじと目を光らせながら、私の言う事を聞いていた。私が言いたい事だけをあげすけに言つてしまうと、君はしばらく黙りつづけていたが、やがて口のすみだけに始めて笑いらしいもの

を漏らした。それがまた普通の微笑とも皮肉な痙攣けいれんとも思いなされた。

それから二人はまた二十分ほど黙ったままで向かい合ってすわりつづけた。

「じやまた持つて来ますから見てください。今度はもつといいものをかいて来ます」

その沈黙のあとで、君が腰を浮かせながら言ったこれだけの言葉はまた僕を驚かせた。まるで別な、初うぶな、素直な子供でもいったような無邪気な明るい声だったから。

不思議なものは人の心の働きだ。この声一つだった。この声一つが君と私とを堅く結びつけてしまったのだった。私は結局君を

いろいろなに邪推した事を悔いながらやさしく尋ねた。

「君は学校はどこです」

「東京です」

「東京？ それじゃもう始まっているんじゃないか」

「ええ」

「なぜ帰らないんです」

「どうしても落第点しか取れない学科があるんでいやになったんです。：：それから少し都合もあつて」

「君は絵をやる気なんですか」

「やれるでしょうか」

そう言った時、君はまた前と同様な強情らしい、人に迫るよう

な顔つきになった。

私もそれに対してなんと答えようもなかった。専門家でもない私が、五六枚の絵を見ただけで、その少年の未来の運命全体をどうして大胆にも決定的に言い切る事ができよう。少年の思い入ったような態度を見るにつけ、私にはすべてが恐ろしかった。私は黙っていた。

「僕はそのうち郷里に——郷里は岩内いわないです——帰ります。岩内のそばに硫黄いおうを掘り出している所があるんです。その景色を僕は夢にまで見ます。その絵を作り上げて送りますから見てください。……絵が好きなんだけど、下手へただからだめです」

私の答ええないのを見て、君は自分をたしなめるように堅いさび

しい調子でこう言った。そして私の目の前に取り出した何枚かの作品をめちやくちやにふろしきに包みこんで帰って行つてしまつた。

君を木戸の所まで送り出してから、私はひとりで手広いりんご畑の中を歩きまわつた。りんごの枝は熟した果実でたわわになつていた。ある木などは葉がすっかり散り尽くして、赤々とした果実だけが真裸で累々と日にさらされていた。それは快く空の晴れ渡つた小春びよりの一日だった。私の庭下駄にわげたに踏まれた落ち葉はかわいた音をたてて微塵みじんに押しひしやがれた。豊満のさびしさとというようなものが空気の中にしんみりと漂つていた。ちようどそのころは、私も生活のある一つの岐路に立つて疑い迷つていた時

だった。私は冬を目の前に控えた自然の前に幾度も知らず知らず棒立ちになつて、君の事と自分の事とをませこぜに考えた。

とにかく君は妙に力強い印象を私に残して、私から姿を消してしまつたのだ。

その後君からは一度か二度問い合わせか何かの手紙が来たきりではつたり消息が途絶えてしまつた。岩内から来たという人などに邂<sup>あ</sup>うと、私はよくその港にこういう名前の青年はいないか、その人を知らないかなぞと尋ねてみたが、さらに手がかりは得られなかつた。硫黄採掘場<sup>いおうさいくつば</sup>の風景画もとうとう私の手もとは届いて来なかつた。

こうして二年三年と月日がたつた。そしてどうかした拍子に君

の事を思い出すと、私は人生の旅路のさびしさを味わった。一度とにかく顔を合わせて、ある程度まで心を触れ合ったどうしが、いったん別れたが最後、同じこの地球の上に呼吸しながら、未来永劫えいごうまたと邂めぐりあ逅あわらない……それはなんとという不思議な、さびしい、恐ろしい事だ。人とは言うまい、犬とでも、花とでも、塵ちりとでもだ。孤独に親しみやすいくせにどこか殉情的で人なつつこい私の心は、どうかした拍子に、このやむを得ない人間の運命をしみじみと感じて深い悒鬱ゆううつに襲われる。君も多くの人の中で私にそんな心持ちを起こさせる一人だった。

しかも浅はかな私ら人間は猿さると同様に物忘れする。四年五年という歳月は君の記憶を私の心からきれいにぬぐい取ってしまおう

とじていたのだ。君はだんだん私の意識の闕しきいを踏み越えて、潜在意識の奥底に隠れてしまおうとじていたのだ。

この短からぬ時間は私の身の上にも私相当の変化をひき起こしていた。私は足かけ八年住み慣れた札さつぽろ幌——ごく手短に言つても、そこで私の上にもいろいろな出来事がわき上がった。妻も迎えた。三人の子の父ともなった。長い間の信仰から離れて教会とも縁を切った。それまでやっていた仕事にだんだん失望を感じ始めた。新しい生活の芽が周囲の拒絶をも無なみして、そろそろと芽ぐみかけていた。私の目の前の生活の道にはおぼろげながら気味悪い不幸の雲がおおいかかろうとじていた。私は始終私自身の力を信じていいのか疑わねばならぬかの二筋道に迷いぬいた——を

去つて、私には物足らない都会生活が始まつた。そして、目にあまる不幸がつぎつぎに足もとからまくし上がるのを手をこまねいてじつとながめねばならなかつた。心の中に起こつたそんな危機の中で、私は捨て身になつて、見も知らぬ新しい世界に乗り出す事を余儀なくされた。それは文学者としての生活だつた。私は今度こそは全くひとりで歩かねばならぬと決心の臍ほぞを堅めた。またこの道に踏み込んだ以上は、できてもできなくても人類の意志と取り組む覚悟をしなければならなかつた。私は始終自分の力量に疑いを感じ通しながら原稿紙に臨んだ。人々が寝入つて後、草木も寝入つて後、ひとり目ざめてしんとした夜の寂せき寞ぼくの中に、万年筆のペン先が紙にきしり込む音だけを聞きながら、私は神が

かりのように夢中になって筆を運ばしている事もあった。私の周囲には亡霊のような魂がひしめいて、紙の中に生まれ出ようと苦しみあせっているのをはつきりと感じた事もあった。そんな時気がついてみると、私の目は感激の涙に漂っていた。芸術におぼれたものでなくって、そういう時のエクスタシーをだれが味わい得よう。しかし私の心が痛ましく裂け乱れて、純一な気持ち<sup>たと</sup>がどこかすみにも見つけられない時のさびしさはまたなんと喩えようもない。その時私は全く一塊の物質に過ぎない。私にはなんにも残されない。私は自分の文学者である事を疑ってしまう。文学者が文学者である事を疑うほど、世に空虚なたよりないものがまたとあろうか。そういう時に彼は明らかに生命から見放されてしまっ

ているのだ。こんな瞬間に限っていつでもきまったように私の念頭に浮かぶのは君のあの時の面影だった。自分を信じていいのか悪いのかを決しかねて、たくましい意志と冷刻な批評とが互いにうち衷に戦って、思わず知らずすべてのものに向かって敵意を含んだ君のあの面影だった。私は筆を捨てて椅子いすから立ち上がり、部屋へやの中を歩き回りながら、自分につぶやくように言った。

「あの少年はどうなつたろう。道を踏み迷わないでいてくれ。自分を誇大して取り返しをつかない死出の旅をしないでいてくれ。もし彼に独自の道を切り開いて行く天てんびん稟がないのなら、どうか正直な勤勉な凡人として一生を終わつてくれ。もうこの苦しみはおれ一人だけでたくさんだ」

ところが去年の十月——と言えば、川岸の家で偶然君というものを知ってからちようど十年目だ——のある日雨のしよぼしよぼと降っている午後に一封の小包が私の手もとに届いた。女中がそれを持って来た時、私は干し魚が送られたと思ったほど部屋の中が生臭くなった。包みの油紙は雨水と泥とでひどくよごれていて、差出人の名前がようやくの事で読めるくらいだったが、そこにしるされた姓名を私はだれともはつきり思い出すことができなかつた。ともかくも思つて私はナイフでがんにような渋びきの麻糸を切りほごしにかかった。油紙を一度めくるとその中にまた麻糸で堅く結わえた油紙の包みがあつた。それをほごすとまた油紙で包んであつた。ちよつと腹の立つほど念の入つた包み方で、百合

の根をはがすように一枚一枚むいて行くと、ようやく幾枚もの新聞紙の中から、手あかでよごれ切った手製のスケッチ帳が三冊、きりきりと棒のように巻き上げられたのが出て来た。私は小気味悪い魚のおいを始終気にしながらその手帳を広げて見た。

それはどれも鉛筆で描かれたスケッチ帳だった。そしてどれも山と樹木ばかりが描かれてあった。私は一目見ると、それが明らかに北海道の風景である事を知った。のみならず、それは明らかにほんとうの芸術家のみが見うる、そして描きうる深刻な自然の肖像画だった。

「やつつけたな！」<sup>とっさ</sup>咄嗟に私は少年のままの君の面影を心いっばいに描きながら下くちびるをかみしめた。そして思わずほほえん

だ。白状するが、それがもし小説か戯曲であつたら、その時の私の顔には微笑の代わりににが苦い嫉妬しつとの色が濃くみなぎっていたかもしれない。

その晩になつて一封の手紙が君から届いて来た。やはり厚い画学紙にすり切れた筆で乱雑にこう走り書きがしてあつた。

「北海道ハ秋モオツ晩クナリマシタ。野原ハ、毎日ノヨウニツメタ  
イ風ガ吹イテイマス。

日ゴロ愛惜シタ樹木ヤ草花ナドガ、イツトハナク落葉シテシマ  
ツテイル。秋ハ人ノ心ニイイロナ事ヲ思ワセマス。

日ニヨリマストアタリノ山々ガ浮キアガツタカト思ワレルクラ  
イ空ガ美シイ時ガアリマス。シカシタイテイハ風トイツシヨニ

雨ガバラバラヤツテ来テ道ヲ悪クシテイルノデス。

昨日スケッチ帳ヲ三冊送リマシタ。イツカあなたニ絵ヲ見テモライマシテカラ故郷デ貧乏漁夫デアル私ハ、毎日忙シイ仕事ト激シイ労働ニ追ワレテイルノデ、ツイコトシマデ絵ヲカイテミタカツタノデスガ、ツイカケナカツタノデス。

コトシノ七月カラ始メテ画用紙ヲトジテ画<sup>ガシヨウ</sup>帖ヲ作り、鉛筆デ(モノ)ニ向カツテミマシタ。シカシ労働ニ害サレタ手ハ思ウヨウニ自分ノ感力ヲ現ワス事ガデキナイデ困リマス。

コンナツマラナイ素描帳ヲ見テクダサイト言ウノハタイヘンツライノデス。シカシ私ハイツワラナイデ始メタ時カラノヲ全部送リマシタ。(中略)

私ノ町ノ知的素養ノイクブンナリトモアル青年デモ、自分トイ  
ウモノニツイテ思イヲメグラス人ハ少ナイヨウデス。青年ノ多  
クハ小サクサカシクオサマツテイルモノカ、ツマラナク時ヲ無  
為ニ送ツテイマス。デスガ私ハ私ノ故郷ダカラ好キデス。

イロイロナモノガ私ノ心ヲオドラセマス。私ノスケツチニ取ル  
ベキトコロノアルモノガアルデシヨウカ。

私ハナントナクコンナツマラヌモノヲあなたニ見テモラウノガ  
ハズカシイノデス。

山ハ絵ノ具ヲドツシリ付ケテ、山ガ地上カラ空ヘモレアガツテ  
イルヨウニカイテミタイモノダト思ツテイマス。私ノスケツチ  
デハ私ノ感ジガドウモ出ナイデコマリマス。私ノ山ハ私ガ實際

ニ感ジルヨリモアマリ平面ノヨウデス。樹木モドウモ物体感ニトボシク思ワレマス。

色ヲツケテミタラヨカロウト考エテイマスガ、時間ト金ガナイノデ、コンナモノデ腹イセヲシテイルノデス。

私ハイロイロナ構図デ頭ガイツパイニナツテイルノデスガ、ナニシロマダカクダケノ腕ガナイヨウデス。オ忙シイあなたニコンナ無遠リヨヲカケテタイヘンスマナク思ツテイマス。イツカオヒマガアツタラ御教示ヲ願イマス。

十月末」

こう思ったままを書きなぐった手紙がどれほど私を動かしたか。君にはちよつと想像がつくまい。自分が文学者であるだけに、私

は他人の書いた文字の中にも真実と虚偽とを直感するかなり鋭い能力が発達している。私は君の手紙を読んでいるうちに涙ぐんでしまった。魚臭い油紙と、立派な芸術品であるスケッチ帳と、君の文字との間には一分のすきもなかつた。「感力」という君の造語は立派な内容を持つ言葉として私の胸に響いた。「山ハ絵ノ具ヲドツシリ付ケテ、山ガ地上カラ空ヘモレアガツテイルヨウニカイテミタイ」：山が地上から空にもれあがる：それはすばらしい自然への肉迫を表現した言葉だ。言葉の中にしみ渡ったこの力は、軽く対象を見て過ごす微温な心の、まねにも生み出し得ない調子を持った言葉だ。

「だれも気もつかず注意も払わない地球のすみっこで、尊い一つ

の魂が母胎を破り出ようとして苦しんでいる」

私はそう思ったのだ。そう思うとこの地球というものが急により美しいものに感じられたのだ。そう感ずるとなんとなく涙ぐんでしまったのだ。

そのころ私は北海道行きを計画していたが、雑用に紛れて躊躇ちよするうちに寒くなりかけたので、もういつそやめようかと思

っていたところだった。しかし君のスケッチ帳と手紙とを見ると、ぜひ君に会ってみたくなくて、一徹にすぐ旅行の準備にかかった。その日から一週間とたたない十一月の五日には、もう上野駅から青森への直行列車に乗っている私自身を見いだした。

札幌さっぽろでの用事を済まして農場に行く前に、私は岩内にあてて

君に手紙を出しておいた。農場からはそう遠くもないから、来られるなら来ないか、なるべくならお目にかかりたいからと言つて。

農場に着いた日には君は見えなかつた。その翌日は朝から雪が降りだした。私は窓の所へ机を持って行つて、原稿紙に向かつて呻しんぎん吟しながら心待ちに君を待つのだつた。そして渋りがちな筆を休ませる間に、今まで書き連ねて来たような過去の回想やら当面の期待やらをつぎつぎに脳裏に浮かばしていたのだつた。

### 三

夕やみはだんだん深まって行つた。事務所をあずかる男が、ラ

ンプを持って来たついでに、夜食の膳ぜんを運ぼうかと尋ねたが、私  
はひよつとすると君が来はしないかという心づかいから、わざと  
そのままにしておいてもらって、またかじりつくように原稿紙に  
向かった。大きな男の姿が部屋へやからのつそりと消えて行くのを、  
視覚のはずれに感じて、都会から久しぶりで来て見ると、物でも  
人でも大きくゆつたりしているのに今さらながら一種の圧迫をさ  
え感ずるのだった。

渋りがちな筆がいくらもはかどらないうちに、夕やみはどんど  
ん夜の暗さに代わって、窓ガラスのむこうは雪と闇やみとのぼんやり  
した明キヤロスキユロ暗キヤロスキユロになってしまった。自然は何かに気きを障さえだした  
ように、夜とともに荒れ始めていた。底力のこもった鈍い空気が、

音もなく重苦しく家の外壁に肩をあてがってうんともたれかか  
るのが、畳の上ですわつていてもなんとなく感じられた。自然が粉  
雪をあおりたてて、所きらわずたたきつけながら、のたうち回っ  
てうめき叫ぶその物すごい気配けはいはもう迫っていた。私は窓ガラス  
に白もめんのカーテンを引いた。自然の暴威をせき止めるために  
人間が苦心して創つくり上げたこのみじめな家屋という領土がもろく  
小さく私の周囲にながめやられた。

突然、ど、ど、ど：：という音が——運動が（そういう場合、  
音と運動との区別はない）天地に起こった。さあ始まったと私は  
二つに折った背中を思わず立て直した。同時に自然は上歯を下く  
ちびるにあてがって思いきり長く息を吹いた。家がぐらぐらと揺

れた。地面からおどり上がった雪が二三度はずみを取っておいて、どつと一気に天に向かつて、謀反むほんでもするようになり、降りかかつて行くあの悲壮な光景が、まざまざと部屋へやの中にすくんでいる私の想像に浮かべられた。だめだ。待ったところがもう君は来やしな。い。停車場からの雪道はもうとうに埋まってしまったに違いないから。私は吹雪ふぶきの底にひたりながら、物さびしくそう思つて、また机の上に目を落とした。

筆はますます洩るばかりだった。軽い陣痛のようなものは時々起こりはしたが、大切な文字は生まれ出てくれなかった。こうして私にとって情けないもどかしい時間が三十分も過ぎたころだったろう。農場の男がまたのそりと部屋にはいつて来て客来を知ら

せたのは。私の喜びを君は想像する事ができる。やはり来てくれたのだ。私はすぐに立って事務室のほうへかけつけた。事務室の障子をあけて、二畳敷きほどもある大囲炉裏の切られた台所に出て見ると、その土間に、一人の男がまだ靴も脱がずに突っ立っていた。農場の男も、その男にふさわしく肥ふとって大きな内儀かみさんも、普通な背たけにしか見えないほどその客きやくという男は大きかった。言葉どおりの巨人だ。頭からすっぽりと頭巾ずきんのついた黒っぽい外套がいとうを着て、雪まみれになって、口から白い息をむらむらと吐き出すその姿は、実際人間という感じを起こさせないほどだった。子供までがおびえた目つきをして内儀さんのひざの上に丸まりながら、その男をうろんらしく見詰めていた。

君ではなかったなと思うと僕は期待に裏切られた失望のために、いらいらしかけていた神経のもどかしい感じがさらにつのるのを覚えた。

「さ、ま、ずっとこつちにお上がりなすつて」

農場の男は僕の客だといふのでできるだけ丁寧にこういって、  
囲炉裏のそばの煎餅蒲団せんべいぶとんを裏返した。

その男はちよつと頭で挨拶あいさつして囲炉裏の座にはいつて来たが、天井の高いだつ広い台所にともされた五分心ごぶしんのランプと、ちよろちよると燃える木節きぶしの囲炉裏火とは、黒い大きな塊マッス的マッスとよりこの男を照らさなかつた。男がぐつしより湿つた兵隊の古長靴ふるながぐつを脱ぐのを待つて、私は黙つたまま案内に立つた。今はもう、この

男によつて、むだな時間がつぶされないように、いやな気分をさせられないようにと心ひそかに願ひながら。

部屋にはいつて二人が座についてから、私は始めてほんとうにその男を見た。男はぶきつちように、それでも四角に下座にすわつて、丁寧に頭を下げた。

「しばらく」

八畳の座敷に余るような鑪さびを帯びた太い声が出た。

「あなたはどなたですか」

大きな男はちよつときまりが悪そうに汗でしどどになつたまつかな額をなでた。

「木本きもとです」

「え、木本君!？」

これが君なのか。私は驚きながら改めてその男をしげしげと見直さなければならなかった。疝かんのために背たけも伸び切らない、どこか病質にさえ見えた悒鬱ゆううつな少年時代の君の面影はどこにあるのだろう。また落葉松からまつの幹の表皮からあすここにのぞき出している針葉の一本をも見のがさずに、愛撫あいぶし理解しようとする、スケッチ帳で想像されるような鋭敏な神経の所有者らしい姿はどこにあるのだろう。地じをつぶしてさしこをした厚衣あつしを二枚重ね着して、どっしりと落ち付いた君のすわり形は、私より五寸も高く見えた。筋肉で盛り上がった肩の上に、正しくはめ込まれた、牡お牛うしのように太い首に、やや長めな赤銅色の君の顔は、健康そのも

ののようにしつかりと乗っていた。筋肉質な君の顔は、どこからどこまで引き締まっていたが、輪郭の正しい目鼻立ちの隈々くまぐまには、心の中からわいて出る寛大な微笑の影が、自然に漂っていて、脂肪気のない君の容ようぼう貌をも暖かく見せていた。「なんとという無類な完全な若者だろう。」私は心の中でこう感嘆した。恋人を紹介する男は、深い猜疑さいぎの目で恋人の心を見守らずにはいられない。君の与えるすばらしい男らしい印象はそんな事まで私に思わせた。

「吹雪ふぶいてひどかったろう」

「なんの。……温ぬくくつて温くつて汗がはあえらく出ました。けんど道がわかんねえで困つてると、しあわせよく水車番に会ったからすぐ知れました。あれは親身しんみな人だっけ」

君の素直な心はすぐ人の心に触れると見える。あの水車番というのは実際このへんで珍しく心持ちのいい男だ。君は手ぬぐいを腰から抜いて湯げが立たんばかりに汗になった顔を幾度も押しぬぐった。

夜食の膳ぜんが運ばれた。「もう我慢がなんねえ」と言つて、君は今まで堅けんくしていたひざをくずしてあぐらをかいた。「きちょうめんめんにすわることなんぞはあねえもんだから。」二人は子供どううししのような楽しい心で膳ぜんに向かった。君の大食は愉快に私を驚かした。食後の茶を飯茶わんに三杯続けさまに飲む人を私は始めて見た。

夜食をすましてから、夜中まで二人の間に取りかわされた楽し

い会話を私は今だに同じ楽しさをもつて思い出す。戸外ではここを先途とあらしが荒れまくっていた。部屋へやの中ではストーブの向かい座にあぐらをかいて、癪いらいのように時おり五分刈りの濃い頭の毛を逆さになで上げる男ぼれのする君の顔が部屋を明るくしていた。君はがんじょうおもしような文鎮おもしになって小さな部屋を吹雪ふぶきから守るように見えた。温あたたまるにつれて、君の周囲から蒸むれ立つ生臭い魚の香は強く部屋じゆうにこもったけれども、それは荒い大海を生々しく連想させるだけで、なんの不愉快な感じも起こさせなかった。人の感覚というものも気ままなものだ。

楽しい会話と言った。しかしそれはおもしろいという意味ではもちろんない。なぜなれば君はしばしば不器用な言葉しりの尻しりを消し

て、曇った顔をしなければならなかったから。そして私も苦しい立場や、自分自身の迷いがちな生活を痛感して、暗い心に捕えられねばならなかったから。

その晩君が私に話して聞かしてくれた君のあれからの生活の輪郭を私はここにぎつと書き連ねずにはおけない。

札幌さっぽろで君が私を訪れてくれた時、君には東京に遊学すべき道

が絶たれていたのだった。一時北海道の西海岸で、小樽おたるをすら凌りようが

駕してにぎやかになりそうな氣勢を見せた岩内港は、さしたる理由もなく、少しも発展しないばかりか、だんだんさびれて行くばかりだったので、それにつれて君の一家にも生活の苦しさが加えられて来た。君の父上と兄上と妹とが気をそろえて水入らずに

せつせと働くにも係わらず、そろそろと泥沼どろぬまの中にめいり込む  
よゝな家運の衰勢をどうする事もできなかつた。学問といふもの  
に興味がなく、従つて成績のおもしろくなかつた君が、芸術に捧ほ  
誓うせいしたい熱意をいだきながら、そのさびしくなりまさる古い港  
に帰る心持ちになつたのはそのためだつた。そういう事を考え合  
わすと、あの時君がなんとなく暗い顔つきをして、いらいらしく  
見えたのがはつきりわかるようだ。君は故郷に帰つても、仕事の  
暇々には、心あてにしている景色でもかく事を、せめてもの頼み  
にして札幌さつぽろを立ち去つて行つたのだらう。

しかし君の家庭が君に待ち設けていたものは、そんな余裕の有  
る生活ではなかつた。年のいった父上と、どつちかと言えれば漁夫

としての健康は持ち合わせていない兄上とが、普通の漁夫と少しも変わりのない服装で網をすきながら君の帰りを迎えた時、大きい漁場の持ち主という風ふうが家の中から根こそぎ無くなっているのをまのあたりに見やった時、君はそれまでの考えののんき過ぎたのに気がついたに違いない。充分の思慮もせずにこんな生活の渦うずに巻き込まれ、

悔やんでいた。その晩、磯いそ臭くさい空気のコもった部屋へやの中で、枕まくらにつきながら、

陥おとしあな 穽なにかかった獣のようないらだたしきを感じて、まぶたを合わす事ができなかつたと君は私に告白した。そうだったろう。その晩一晩だけの君の心持ちをくわしく考えただけで、私は一つの力強い小品を作り上げる事ができると思う。

しかし親思いで素直な心を持って生まれた君は、君を迎え入れようとする生活からのがれ出る事をしなかったのだ。詰め襟つめえりのホツクをかけずに着慣れた学校服を脱ぎ捨てて、君は厚衣あつしを羽織る身になった。明鯛すけそうから鱈たら、鱈たらから鯧にしん、鯧にしんから烏賊いかというように、四季絶える事のない忙いそがしい漁ぎよろう撈の仕事にたずさわりながら、君は一年じゅうかの北海の荒波や激しい気候と戦って、さびしい漁夫の生活に没頭しなければならなかった。しかも港内に築かれた防波堤が、技師の飛んでもない計算違いから、波を防ぐ代わりに、砂をどんどん港内に流し入れるはめになってから、船がかりのよかつた海岸は見る見る浅瀬に変わって、出漁には都合のいい目ぬきの位置にあつた君の漁場はすたれ物同様になってしまい、やむ

なく高い駄賃だちんを出して他人の漁場を使わなければならなくなったのと、北海道第一と言われた鯺くきの群来が年々減つて行くために、さらぬだに生活の圧迫を感じて来ていた君の家は、親子が気心をそろえ力を合わして、命がけに働いても年々貧窮に追い迫られ勝ちになつて行つた。

親身しんみな、やさしい、そして男らしい心に生まれた君は、黙つてこのありさまを見て過ごす事はできなくなつた。君は君に近いものの生活のために、正しい汗を額に流すのを悔いたり恥じたりしてはいられなくなつた。そして君はまっしぐらに労働生活のまっただ中はとうに乗り出した。寒暑と波濤はとうと力わざと荒くれ男らとの交わりは君の筋骨と度胸とを鉄のように鍛え上げた。君はすすくすくと

大木のようにたくましくなった。

「岩内にも漁夫りようしは多いども腕うでぢから力にかけておらにかなうものは一人だつていねえ」

君はあたりまえの事を言つて聞かせるようにこう言つた。私の前にすわつた君の姿は私にそれを信ぜしめる。

パンのために生活のどん底まで沈み切つた十年の月日——それは短いものではない。たいていの人はおそらくその年月の間にそういう生活からはね返る力を失つてしまふだろう。世の中を見渡すと、何百万、何千万の人々が、こんな生活にその天授の特異な力を踏みしだかれて、むなしく墳墓の草となつてしまつたらう。それは全く悲しい事だ。そして不条理な事だ。しかしだれがこの

不条理な世相に非難の石をなげうつ事ができるだろう。これは悲しくも私たちの一人一人が肩の上に背負わなければならない不条理だ。特異な力を埋め尽くしてまでも、当面の生活に没頭しなければならぬ人々に対して、私たちは尊敬に近い同情をすらささげねばならぬ悲しい人生の事実だ。あるがままの実相だ。

パンのために精力のあらん限りを用い尽くさねばならぬ十年——それは短いものではない。それにもかかわらず、君は性格の中に植え込まれた憧<sup>どうけい</sup>憬を一刻も捨てなかつたのだ。捨てる事ができなかつたのだ。

雨のためとか、風のためとか、一日も安閑としてはいられない漁夫の生活にも、なす事なく日を過ぎさねばならぬ幾日かが、一

年の間にはたまに来る。そういう時に、君は一冊のスケッチ帳（小学校用の粗雑な画学紙を不器用に網糸でつづつたそれ）と一本の鉛筆とを、魚の鱗うろこや肉片がこびりついたまま、ごわごわにかわいた仕事着のふところにねじ込んで、ぶらりと朝から家を出るのだ。

「会う人はおら事気違いだというんです。けんどおら山をじつとこう見ていると、何もかも忘れてしまうです。だれだったか何かの雑誌で『愛は奪ふんだくう』というものを書いて、人間が物を愛するのはその物を強奪ふんだくするだと言っていたようだが、おら山を見ていると、そんな気は起こしたくも起こらないね。山がしっくりおら事引きずり込んでしまつて、おらただあきれて見ているだけです。

その心持ちがかいてみたかつて、あんな下手へたなものをやってみるが、からだめです。あんな山の心持ちをかけた絵があらば、見るだけでも見たいもんだが、ありませんね。天気の良い気持ちのいい日にうんと力こぶを入れてやってみたらと思うけど、暮らしも忙せわしいし、やってもおらにはやっぱりに手に余るだろう。色もつけてみたいが、絵の具は国に引つ込む時、絵の好きな友だちにくれてしまったから、おらのような絵にはまた買うのも惜しいし。海を見れば海でいいが、山を見れば山でいい。もったいないくらいそこいらにすばらしいものがあるんだが、力が足んねえです」

と言ったりする君の言葉も様子も私には忘れる事のできないも

のになつた。その時はあぐらにしたりようすね 両脛を手足でつぶれそうに  
堅く握つて、胸に余る興奮を静かな太い声でおとなしく言い現わ  
そうとしていた。

私どもが一時過ぎまで語り合つて寢床にはいつて後も、吹きま  
く吹雪は露ふかきほども力をゆるめなかつた。君は君で、私は私で、妙  
に寝つかれない一夜だつた。踏まれても踏まれても、自然が与え  
た美妙的な優しい心を失わない、失い得ない君の事を思つた。仁王におう  
のようなたくましい君の肉体に、少女のように敏感な魂を見いだ  
すのは、この上なく美しい事に私には思えた。君一人が人生の生  
活というものを明るくしているようにさえ思えた。そして私はだ  
んだん私の仕事の事を考えた。どんなにもがいてみてもまだまだ

ほんとうに自分の所有を見いだす事ができないで、ややもするとこじれた反抗や敵愾心てきがいしんから一時的な満足を求めたり、生活をゆがんで見る事に興味を得ようとしたりする心の貧しさ——それが私を無念がらせた。そしてその夜は、君のいかにも自然な大きな生長と、その生長に対して君が持つ無意識な謙譲と執着とが私の心に強い感激を起こさせた。

次の日の朝、こうしてはいられないと言って、君はあらしの中に帰りじたくをした。農場の男たちすらもう少し空模様を見てからししろとしいて止めるのも聞かず、君は素足にかちんかちんに凍った兵隊長靴ながぐつをはいて、黒い外套がいとうをしつかり着こんで土間に立った。北国の冬の日暮らしにはことさら客がなつかしまれる

ものだ。なごりを心から惜しんでだろう、農場の人たちも親身しんみにかれこれと君をいたわった。すっかり頭巾ずきんをかぶつて、十二分に身じたくをしてから出かけたらいだろうとみんなが寄つて勧めたけれども、君は素朴そぼくなばかりから帽子もかぶらずに、重々しい口調で別れの挨拶あいさつをすまずと、ガラス戸を引きあけて戸外に出た。

私はガラス窓をこずいて外面に降り積んだ雪を落としながら、吹きたまつたまつ白な雪の中をこいで行く君を見送った。君の黒い姿は——やはり頭巾をかぶらないまま、頭をむき出しにして雪になぶらせた——君の黒い姿は、白い地面に腰まで埋まって、あるいは濃く、あるいは薄く、縞しまになって横降りに降りしきる雪

の中を、ただ一人だんだん遠ざかって、とうとうかすんで見えなくなつてしまつた。

そして君に取り残された事務所は、君の来る前のような単調なさびしさと降りつむ雪とに閉じこめられてしまつた。

私がそこを発つて東京に歸つたのは、それから三四日後の事だつた。

## 四

今は東京の冬も過ぎて、梅が咲き椿つばきが咲くようになった。太陽の生み出す慈愛の光を、地面は胸を張り広げて吸い込んでゐる。

君の住む岩内の港の水は、まだ流れこむ雪解ゆきげの水に薄濁るほどにもなつてはいまい。鋼鉄を水で溶かしたような海面が、ややもすると角立かじだつた波をあげて、岸を目がけて終日攻めよせているだろう。それにしてももう老いさらばえた雪道を器用に拾いながら、金魚売りが天秤棒てんびんぼうをになつて、無理にも春をよび覚さますような売り声を立てる季節にはなつたろう。浜には津軽つがるや秋田あきたへんから集まつて来た旅雁りよがんのような漁夫たちが、鯧にしんの建網たてあみの修繕をしたり、大釜おおがまの据すえ付けつけをしたりして、黒ずんだ自然の中に、毛布の甲がけがけや外套がいとうのけげばけげしい赤色をまき散らす季節にはなつたろう。このころ私はまた妙に君を思い出す。君の張り切つた生活のありさまを頭に描く。君はまざまざと私の想像の視野に現

われ出て来て、見るように君の生活とその周囲とを私に見せてくれる。芸術家にとっては夢と現うつとの閼しきいはないと言つていい。彼は現実を見ながら眠っている事がある。夢を見ながら目を見開いている事がある。私が私の想像にまかせて、ここに君の姿を写し出してみる事を君は拒むだろうか。私の鈍い頭にも同感というものの力がどのくらい働きうるかを私は自分でためしてみたいのだ。君の寛大はそれを許してくれる事と私はきめてかかろう。

君を思い出すにつけて、私の頭にすぐ浮かび出て来るのは、なんとと言ってもさびしく物すさまじい北海道の冬の光景だ。

## 五

長い冬の夜はまだ明けない。雷電峠と反対の湾の一角から長く突き出た造りぞこねの防波堤は大蛇だいじやの亡骸むくろのようなまっ黒い姿を遠く海の面に横たえて、夜目にも白く見える波濤はとうの牙きばが、小休おやみもなくその胴腹くに噛かかっている。砂浜まに繁もやわられた百艘そう近い大和船は、舳へさきを沖きのほうへ向けて、互いにしがみつきながら、長い帆柱ほしちゆうを左右前後に振り立てている。そのそばに、さまざまの漁具いさなぐと弁当ひつのお櫃ひつとを持って集まって来た漁夫たちは、言葉少なに物を言いかわしながら、防波堤の上に建てられた組合の天気予報の信号灯を見やっている。暗い闇やみの中に、白と赤との二つの火が、夜鳥の目のようにぎらりと光っている。赤と白との二つの球は、

危険警戒を標示する信号だ。船を出すには一番鳥いちばんどりが鳴きわたる時刻まで待つてからにしなければならぬ。町のほうは寝しずまつて灯ひ一つ見えない。それらのすべてをおおいくるめて凍った雲は幕のように空低くかかっている。音を立てないばかりに雲は山のほうから沖のほうへと絶え間なく走り続ける。汀みぎわまで雪に埋まった海岸には、見渡せる限り、白波がざぶんざぶん砕けて、風が——空気そのものをおかさらつてしまひそうな激しい寒い風が雪に閉ざされた山を吹き、漁夫を吹き、海を吹きまくつて、まっしぐらに水と空との閉じ目をめがけて突きぬけて行く。

漁夫たちの群れから少し離れて、一団になつたお内儀かみさんたちの背中から赤子の激しい泣き声が起こる。しばらくしてそれがし

ずまると、風の生み出す音の高い不思議な沈黙がまた天と地とに  
みなぎり満ちる。

やや二時間もたったと思うころ、あや目も知れない闇やみの中から、  
硫黄いおうが丘たけの山頂——右肩をそびやかして、左をなで肩にした——  
が雲の産んだ鬼子のように、空中に現われ出る。鈍い土がまだ振  
り向きもしないうちに、空はいち早くも暁の光を吸い初めたのだ。  
模範船（港内に四五艘そうあるのだが、船も大きいし、それに老練  
な漁夫が乗り込んでいて、他の船にかけ引き進退の合図をする）  
の船頭が頭をあつめて相談をし始める。どことも知れず、あの昼  
にはけうとい羽色を持った鳥からすの声が勇ましく聞こえます。漁夫た  
ちの群れもお内儀かみさんたちのかたまりも、石のような不動の沈黙

から急に生き返つて来る。

「出すべ」

そのさざめきの間に、潮で鏽さび切つた老船頭の幅の広い塩し辛おから  
声こゑが高くこゝろ響く。

漁夫たちは力強い鈍さをもつて、互いに今まで立ち尽くして  
いた所を歩み離れてめいめいの持ち場につく。お内儀さんたちは右  
に左に夫おつとや兄や情人やを介抱して駆け歩く。今まで陶酔したよう  
にたわいもなく波に揺られていた船の艦ともには漁夫たちが膝ひざがしら頭  
まで水に浸つて、わめき始める。ののしり騒ぐ声がひとしきり聞  
こえたと思うと、船はよんどころなさそうに、右に左に揺らぎな  
がら、船首を高くもたげて波頭を切り開き切り開き、狂いあばれ

る波打ちぎわから離れて行く。最後の高いのしりの声とともに、今までの鈍さに似ず、あらゆる漁夫は、猿ましらのように船の上に飛び乗っている。ややともすると、舳へさきを岸に向けようとする船の中からは、長い竿さおが水の中に幾本も突き込まれる。船はやむを得ずまた立ち直って沖を目ざす。

この出船の時の人々の気組み働きは、だれにでも激烈なアレツグロで終わる音楽の一片を思い起こさすだろう。がやがやと騒ぐ聴衆のような雲や波の擾じょうらん乱の中から、漁夫たちの鈍い *Largo* *pianissimo* とも言うべき運動が起こって、それが始めのうちは周圀の騒音の中に消されているけれども、だんだんとその運動は熱情的となり力づいて行って、霊を得たように、漁夫の乗り込んだ

舟が波を切り波を切り、だんだんと早くなる一定のテンポを取って沖に乗り出して行くさまは、力強い楽手の手で思い存分大胆にかなでられる Allegro Molto を思い出させずにはおかぬだろう。すべてのものの緊張したそこには、いつでも音楽が生まれるものと見える。

船はもう一個の敏活な生き物だ。船べりからは百足虫むかでのように艫ろの足を出し、艫ともからは鯨のように舵かじの尾を出して、あの物悲しい北国特有な漁夫のかけ声に励まされながら、まっ暗に襲いかかる波のしぶきをしのぎ分けて、沖へ沖へと岸を遠ざかつて行く。海岸にひとかたまりになって船を見送る女たちの群れはもう命のない黒い石ころのようにしか見えない。漁夫たちは艫をこぎなが

ら、帆綱を整えながら、浸水あかをくみ出しながら、その黒い石ころと、模範船の艦から一字を引いて怪火かいのように流れる炭火の火の子とをながめやる。長い鉄の火箸ひばしに火の起こった炭をはさんで高くあげると、それが風を食って盛んに火の子を飛ばすのだ。すべての船は始終それを目あてにして進退をしなければならぬ。炭火が一つあげられた時には、天候の悪くなる印しるしと見て船を停とめ、二つあげられた時には安全になった印として再び進まねばならぬのだ。暁ぎょうあん闇を、物々しく立ち騒ぐ風と波との中に、海面低く火花を散らしながら青い炎を放って、燃え上がり燃えかすれるその光は、幾百人の漁夫たちの命を勝手に支配する運命の手だ。その光が運命の物すごさをもって海上に長く尾を引きながら消えて

行く。

どこからともなく海鳥の群れが、白く長い翼に羽音を立てて風を切りながら、船の上に現われて来る。猫ねこのような声で小さく呼びかわすこの海の砂漠さばくの漂浪者は、さっと落として来て波に腹をなでさすかと思うと、翼を返して高く舞い上がり、ややしばらく風に逆らってじつとこたえてから、思い直したように打ち連れて、小気味よく風に流されて行く。その白い羽根がある瞬間には明るく、ある瞬間には暗く見えだすと、長い北国の夜もようやく明け離れて行くこうとするのだ。夜の闇やみは暗く濃く沖のほうに追いつめられて、東の空には黎明れいめいの新しい光が雲を破り始める。物すさまじい朝焼けだ。あやまって海に落ち込んだ悪魔が、肉付きのい

い右の肩だけを波の上に現わしている、その肩のような雷電峠の絶巔ぜつてんをなでたりたたいたりして叢立むらだち急ぐ嵐あらしぐも 雲は、炉に投げ入れられた紫のような光に燃えて、山ふところの雪までも透明な藤色ふじいろに染めてしまう。それにしても明け方のこの暖かい光の色に比べて、なんとという寒い空の風だ。長い夜のために冷え切った地球は、今そのいちばん冷たい呼吸を呼吸しているのだ。

私は君を忘れてはならない。もう港を出離れて木の葉のように小さくなつた船の中で、君は配繩はいなわの用意をしながら、恐ろしいまでに莊嚴そうごんなこの日の序幕をながめているのだ。君の父上は舵か座じざにあぐらをかいて、時々晴雨計を見やりながら、変化のはげしいそのころの天気模様を考えている。海の中から生まれて来たよ

うな老漁夫の、皺しわにたたまれた鋭い眼は、雲一片の徴しるしをさえ見落  
とすまいと注意しながら、顔には木彫のような深い落ち付きを見  
せている。君の兄上は、凍つて自由にならない手のひらを腰のあ  
たりの荒布にこすりつけて熱を呼び起こしながら、帆綱を握つて、  
風の向きと早さに応じて帆を立て直している。雇われた二人の漁  
夫は二人の漁夫で、一ふた尋ひろ置きに本ほん縄なわから下がった針に餌えをつ  
けるのに忙せわしい。海の上を見渡すと、港を出てからてんでんばら  
ばらに散らばつて、朝の光に白い帆をかがやかした船という船は、  
等しく沖を目がけて波を切り開いて走りながら、君の船と同様な  
仕事にいそしんでいるのだ。

夜が明け離れると海風と陸風との変わり目が来て、さすがに荒

れがちな北国の冬の海の上もしばらくは穏やかになる。やがて瀬は達せられる。君らは水の色を一目見たばかりで、海中に突き入った陸地と海そのものの界さかいとも言うべき瀬がどう走っているかをすぐ見て取る事ができる。

帆がおろされる。勢いで走りつづける船足は、舵かじのために右なり左なりに向け直される。同時に浮標うきの付いた配繩はいなわの一端が氷のような波の中にざぶんざぶんと投げこまれる。二十五町から三十町に余る長さをもった縄全体が、海上に長々と横たえられるまでは、朝早くから始めても、日が子午線近く来るまでかからねばならないのだ。君らの船は艫ろにあやつられて、横波を食いながらしぶしぶ進んで行く。ざぶり……ざぶり……寒気のために比重

の高くなつた海の水は、凍りかかつた油のような重さで、物すごいインド藍あゐの底のほうに、雲間を漏れる日光で鈍く光る配繩の餌えをのみ込んで行く。

今まで花のような模様を描いて、海面のところどころに日光を恵んでいた空が、急にさつと薄曇ると、どこからともなく時雨しぐれのような霰あられが降つて来て海面を泡立あわだたす。船と船とは、見る見る薄のりい糊のりのような青白い膜まくに隔てられる。君の周囲には小さな白い粒がかわき切つた音を立てて、あわただしく船板を打つ。君は小さかしい邪魔者から毛糸えりまきの襟えりまき巻で包んだ顔をそむけながら、配繩を丹念におろし続ける。

ずっと空が明るくなる。あられ霰はどこかへ行つてしまった。そして

まつさおな海面に、漁船は陰になりひなたになり、堅い輪郭を描いて、波にもまれながらさびしく漂っている。

きげん買いな天気は、一日のうちに幾度となくこうした顔のしかめ方をする。そして日が西に回るに従ってこのふきげんは募って行くばかりだ。

寒暑をかまっていられない漁夫たちも吹きざらしの寒さにはひるまずにはいられない。配はいなわ縄を投げ終わると、身ぶるいしながら五人の男は、舵座かじざにおこされた焔炉こんろの火のまわりに慕い寄って、大きなお櫃ひつから握り飯をわしづかみにつかみ出して食いむさぼる。港を出る時には一かたまりになっていた友船も、今は木の葉のように小さく互い互いからかけ隔たって、心細い弱々しそうな姿を、

はて  
涯もなく露領に続く海原のここかしこに漂わせている。三里の  
余も離れた陸地は高い山々の半腹から上だけを水の上に見せて、  
降り積んだ雪が、日を受けた所は銀のように、雲の陰になった所  
は鉛のように、妙に険しい輪郭を描いている。

漁夫たちは口を食物で頬張らせながら、きのうの漁のありさま  
や、きょうの予想やらをいかにも地味な口調で語り合っている。

そういう時に君だけは自分が彼らの間に不思議な異邦人である事  
に気づく。同じ艀ろをあやつり、同じ帆綱をあつかいながら、なん  
という悲しい心の距りへだただろう。押しつぶしてしまおうと幾度試み  
ても、すぐあとからまくしかかって来る芸術に対する執着をどう  
することもできなかつた。

とはいえ、飛行機の将校にすらなろうという人の少ない世の中に、生きては人の冒険心をそそつていかにも雄々しい頼みがいある男と見え、死んでは万人にその英雄的な最後を惜しみ仰がれ、遺族まで生活の保障を与えられる飛行将校にすらなろうという人の少ない世の中に、荒れても晴れても毎日毎日、一命を投げてかかって、緊張し切った終日の労働に、玉の緒で炊き上げた<sup>た</sup>ような飯を食って一生を過ごして行かねばならぬ漁夫の生活、それにはいささかも遊戯的な余裕がないだけに、命とかけがえの真実な仕事であるだけに、言葉には現わし得ないほど尊さと厳肅さを持つている。ましてや彼らがこの目ざましいけなげな生活を、やむを得ぬ、苦しい、しかし当然な正しい生活として、誇りもなく、

矯きよう飾しよくもなく、不平もなく、素直に受け取り、軛くびきにかかった輓ひきうし牛きうしのような柔順な忍耐と覚悟とをもつて、勇ましく迎え入れている、その姿を見ると、君は人間の運命のはかなさと美しさとに同時に胸をしめ上げられる。

こんな事を思うにつけて、君の心の目にはまざまざと難破船の痛ましい光景が浮かび出る。君はやはり舵座かじざにすわって他の漁夫と同様に握り飯を食ってはいるが、いつのまにか人々の会話からは遠のいて、物思わしげに黙りこくってしまう。そして果てしもなく回想の迷路をたどって歩く。

## 六

それはある年の三月に、君が遭遇した苦<sup>にが</sup>い経験の一つだ。模範船からすぐ引き上げろという信号がかかったので、今までも気づかないながら仕事を続けていた漁船は、打ち込み打ち込む波濤<sup>はとう</sup>と戦いながら配<sup>はい</sup>繩<sup>なわ</sup>をたくし上げにかかったけれども、吹き始めた暴風は一秒ごとに募るばかりで、船頭はやむなく配繩を切つて捨てさせなければならなくなつた。

「またはあ錢<sup>ぜに</sup>こ海さ捨てるだ」

と君の父上は心から嘆息してつぶやきながら君に命じて配<sup>はい</sup>繩<sup>なわ</sup>を切つてしまった。

海の上はただ狂い暴<sup>あ</sup>れる風と雪と波ばかりだ。縦横に吹きまく

風が、思いのままに海をひっぱたくので、つるし上げられるように高まつた三角波が互いに競つて取つ組み合つと、取つ組み合つただけの波はたちまちまつ白な泡あわの山に変じて、その巔いただきが風にちぎられながら、すさまじい勢いで目あてもなく倒れかかる。目も向けられないような濃い雪の群れは、波を追つたり波からののがれたり、さながら風の怒りをいどむ小悪魔のように、面憎つらにくく舞いながら右往左往に飛びはねる。吹き落として来た雪のちぎれは、大きな霧のかたまりになつて、海とすれすれに波の上を矢よりも早く飛び過ぎて行く。

雪と浸水あかとで糊のりよりもすべる船板の上を君ははうようようにして舳へびさきのほうへにじり寄り、左の手に友綱の鉄環かなわをしつかりと握つて腰

を据えながら、右手に磁石をかまえて、大声で船の進路を後ろに伝える。二人の漁夫は、大竿おおざおを風上になつた舷ふなべりから二本突き出して、動かないように結びつける。船の顛覆てんぷくを少しなりとも防ごうためだ。君の兄上は帆綱を握つて、舵座かじざにいる父上の合図どおりに帆の上げ下げを誤るまいと一心になっている。そしてその間にもしつきりなしに打ち込む浸水あかを急がしく汲くんでは舷から捨てている。命がけに呼びかわす互い互いの声は妙に上うわずつて、風に半分がた消されながら、それでも五人の耳には物すごくも心強くも響いて来る。

「おも舵つ」

「右にかわすだつてえば」

「右だ：：右だぞっ」

「帆綱をしめろやっ」

「友船は見えねえかよう、いたらくつつけやーい」

どう吹こうとためらっていたような疾風がやがてしつかり方向を定めると、これまでただあてもなく立ち騒いでいたらしく見える三角波は、だんだんと丘陵のような紆濤（うねり）に変わって行つた。言葉どおりに水平に吹雪く雪の中を、後ろのほうから、見上げるよたいせきうな大きな水の堆積が、想像も及ばない早さでひた押しに押しふぶて来る。

「来たぞーっ」

緊張し切つた五人の心はまたさらに恐ろしい緊張を加えた。ま

ぶしいほど早かった船足が急によどんで、後ろに吸い寄せられて、  
 艫ともが薄気味悪く持ち上がって、船中に置かれた品物ががらがらと  
 音をたてて前にのめり、人々も何かに取りついて腰のすわりを定  
 めなおさなければならなくなった瞬間に、船はひとあおりあおつ  
 て、物すごい不動から、奈落ならくの底までもとすさまじい勢いで波の  
 背をすべり下った。同時に耳に余る大きな音を立てて、  
 風倒ようぶだおしに倒れかえる。わきかえるような泡あわの混乱の中に船をも  
 まれながら行く手を見ると、いったんこわれた波はすぐまた物す  
 ごい丘陵に立ちかえって、目の前の空を高くしきりながら、見る  
 見る悪夢のように遠ざかって行く。

ほっと安堵あんどの息をつく隙すきも与えず、後ろを見ればまた<sup>うねり</sup>紆濤だ。

水の山だ。その時、

「あぶねえ」

「ぼきりっ」

というけたたましい声を同時に君は聞いた。そして同時に野獣の敏感さをもつて身構えしながら後ろを振り向いた。根もとから折れて横倒しに倒れかかる帆柱と、急に命を失ったようにしわになつてたたまる帆布と、その陰から、飛び出しそうに目をむいて、大きく口をあけた君の兄上の顔とが映った。

君は咄嗟とつさに身をかわして、頭から打つてかかろうとする帆柱から身をかばった。人々は騒ぎ立って艚ろを構えようとひしめいた。けれども無二無三な船足の動揺には打ち勝てなかった。帆の自由

である限りは金輪際こんりんざい船を顛覆てんぷくさせないだけの自信を持った人たちも、帆を奪い取られては途方に暮れないではいられなかった。船足のとまった船ではもう舵かじもきかない。船は波の動揺のまにまに勝手放題に荒れ狂った。

第一の紆濤うねり、第二の紆濤、第三の紆濤には天運が船を顛覆からかばってくれた。しかし特別に大きな第四の紆濤を見た時、船中の人々は観念しなければならなかった。

雪のために薄くぼかされたまっ黒な大きな山、その頂からは、火が燃え立つように、ちらりちらり白い波なみがしら頭が立つては消え、消えては立ちして、瞬間ごとに高さを増して行った。吹き荒れる風すらがそのためにさえぎり止められて、船の周囲には気味の悪

い静かさが満ち広がった。それを見るにつけても波の反対の側をひた押しに押す風の激しさ強さが思いやられた。艫ともを波のほうへ向ける事も得しないで、力なく漂う船の前まで来ると、波の山はいきなり、獲物に襲いかかる猛獣のように思いきり背延びをした。と思うと、波頭は吹きつける風にそりを打つて、とくずれどうこんだ。はつと思つたその時おそく、君らはもうまっ白な泡あわに五体を引きちぎられるほどもまれながら、船底を上にして顛覆てんぷくした船体にしがみつこうともがいていた。見ると君の目の届く所には、君の兄上が頭からずぶぬれになつて、ぬるぬると手がかりのない舷ふなべりに手をあてがってはすべり、手をあてがってはすべりしていた。君は大声を揚げて何か言つた。兄上も大声を揚げて何か言つてる

らしかつた。しかしお互いに大きな口をあくのが見えるだけで、声は少しも聞こえて来ない。

割合に小さな波があとからあとから押し寄せて来て、船を揺り上げたり押しおろしたりした。そのたびごとに君たちは船との縁を絶たれて、水の中に漂わねばならなかった。そして君は、着込んだ厚衣あつしの芯しんまで水が透つて鉄のように重いにもかかわらず、一心不乱に動かす手足と同じほどの忙せわしさで、目と鼻ぐらいの近さに押し迫つた死からのがれ出る道を考えた。心の上澄うわすみは妙におどおどとあわてている割合に、心の底は不思議に気味悪く落ちついていた。それは君自身にすら物すごいほどだった。空といい、海といい、船といい、君の思案といい、一つとして目あてなく動

揺しないものはない中に、君の心の底だけが悪落ち付きに落ち付いて、「死にはしないぞ」とちやんときめ込んでいるのがかえって薄気味悪かった。それは「死ぬのがいやだ」「生きていたい」「生きる余席の有る限りはどうあつても生きなければならぬ」「死にはしないぞ」という本能の論理的結論であつたのだ。この恐ろしい盲目な生の事実が、そしてその結論だけが、目を見すえたように、君の心の底に落ち付き払っていたのだつた。

君はこの物すごい無気味な衝動に駆り立てられながら、水船なりに顛覆した船を裏返す努力に力を尽くした。残る四人の心も君と変わりはないと見えて、険しい困苦と戦いながら、四人とも君のいるふなべり舷のほうへ集まって来た。そして申し合わせたように、

いっしよに力を合わせて、船の胴腹にはい上がるようにしたので、船は一方にかしぎ始めた。

「それ今ひと息だぞっ」

君の父上がしぼり切った生命を声にしたように叫んだ。一同はまた懸命な力をこめた。

おりよく——全くおりよく、天運だ——その時船の横よこ面つらに大きな波が浴びせこんで来たので、片方だけに人の重りの加わった船はくるりと裏返った。舷までひたひたと水に埋もれながらもとにかく船は真向きになって水の面に浮かび出た。船が裏返る拍子に五人は五人ながら、すっぽりと氷のような海の中にもぐり込みながら、急に勢いづいて船の上に飛び上がろうとした。しかしし

こたま着込んだ衣服は思うざまぬれ透っていて、ややともすれば人々を波の中に吸い込もうとした。それが一方の舷に取りついて力をこめればまた顛覆するにきまつている。生死の瀬戸ぎわにはまり込んでいる人々の本能は恐ろしいほど敏捷な働きをする。五人の中の二人は咄嗟に反対の舷に回った。そして互いに顔を見合わせながら、一度にやつと声をかけ合わせて半身を舷に乗り上げた。足のほうを船底に吸い寄せられながらも、半身を水から救い出した人々の顔に現われたなんとも言えない緊張した表情——それを君は忘れる事ができない。次の瞬間にはわつと声をあげて男泣きに泣くか、それとも我れを忘れて狂うように笑うか、どちらかをしそうな表情——それを君は忘れる事ができない。

すべてこうした懸命な努力は、降りしきる雪と、荒れ狂う水と、海面をこすつて飛ぶ雲とで表わされる自然の憤怒ふんぬの中で行なわれたのだ。怒つた自然の前には、人間は塵ちりひとひらにも及ばない。人間などという存在は全く無視されている。それにも係わらず君たちは頑固がんこに自分たちの存在を主張した。雪も風も波も君たちを考えにいれてはいないのに、君たちはしてもそれらに君たちを考えさせようとした。

ふなべり

舷ふなべりを乗り越して奔馬のような波頭がつぎつぎにすり抜けて行く。それに腰まで浸しながら、君たちは船の中に取り残された得物をなんでもかまわず取り上げて、それを働かしながら、死からのがべき一路を切り開こうとした。ある者は艀ろを拾いあてた。ある

ものは船板を、あるものは水柄杓みずびしやくを、あるものは長いたわしの柄を、何ものにも換えがたい武器のようにしつかり握っていた。そして舷から身を乗り出して、子供がするように、水を漕こいだり、浸水あかをかき出したりした。

吹き落ちる気配けはいも見えないあらしは、果てもなく海上を吹きまくる。目に見える限りはただ波頭ばかりだ。犬のような敏捷すばやさで方角を嗅かぎ慣れている漁夫たちも、今は東西の定めようがない。東西南北は一つの鉢はちの中ですりまぜたように渾沌こんとんとしてしまった。

薄い暗黒。天からともなく地からともなくわき起こる大叫喚。ほかにはなんにもない。

「死にはしないぞ」——そんなはめになってからも、君の心の底は妙に落ち着いて、薄気味悪くこの一事を思いつづけた。

君のそばには一人の若い漁夫がいたが、その右の顛顛こめかみのへんから生々しい色の血が幾条にもなつて流れていた。それだけがはつきり君の目に映つた。「死にはしないぞ」——それを見るにつけても、君はまたしみじみとそう思つた。

こういう必死な努力が何分続いたのか、何時間続いたのか、時間というもののすつかり無くなつてしまつたこの世界では少しもわからない。しかしながらとにかく君が何ものも納れ得ない心の中に、疲労という感じを覚えだして、これは困つた事になつたと思つたころだつた、突然一人の漁夫が意味のわからない言葉を大

きな声で叫んだのは。今までも五人ながら始終何か互いに叫び続けていたのだったが、この叫び声は不思議にきわ立ってみんなの耳に響いた。

残る四人は思わず言い合わせたようにその漁夫のほうを向いて、その漁夫が目をつけているほうへ視線をたどって行つた。

船！ ……船！

濃い吹雪ふぶきの幕のあなたに、さだかには見えないが、波そびらの背に乗つて四十五度くらいの角度に船首を下に向けながら、帆をいっばいに開いて、矢よりも早く走つて行く一艘そうの船！

それを見ると何か君の胸をどきんと下からつき上げて来た。

君は思わずすすり泣きでもしたいような心持ちになつた。何はさ

ておいても君たちはその船を目がけて助けを求めながら近寄って行かねばならぬはずだった。余の人たちも君と同様、確かに何物かを目の前に認めたらしく、奇怪な叫び声を立てた漁夫が、目を大きく開いて見つめているあたりを等しく見つめていた。そのくせ一人として自分らの船をそつちのほうへ向けようとしているらしい者はなかった。それをいぶかる君自身すら、心がただわくわくと感傷的になりまさるばかりで、急いで働かすべき手はかえつて萎<sup>な</sup>えてしまっていた。

白い帆をいっばいに開いたその船は、依然として船首を下に向けたまま、矢のように走って行く。降りしきる吹雪<sup>ふぶき</sup>を隔てた事だから、乗り組みの人の数もはつきりとは見えないし、水の上に割

合に高く現われている船の胴も、木の色というよりは白堊はくあのよう  
な生白さに見えていた。そして不思議な事には、波の腹に乗つて  
も波の背に乗つても、舳へさきは依然として下に向いたままである。風  
の強弱に応じて帆を上げ下げする様子もない。いつまでも目の前  
に見えながら、四十五度くらいに船首を下向きにしたまま、矢よ  
りも早く走つて行く。

ぎよつとして気がつくと、その船はいつのまにか水から離れて  
いた。波頭から三段も上と思われるあたりを船は傾かしいだまま矢よ  
りも早く走っている。君の頭はかあんとしてすくみ上がってしま  
った。同時に船はだんだん大きくぼやけて行つた。いつのまにか  
その胴体は消えてなくなつて、ただまっ白い帆だけが矢よりも早

く動いて行くのが見やられるばかりだ。と思うまもなくその白い大きな帆さえが、降りしきる雪の中に薄れて行って、やがてはかき消すように見えなくなってしまった。

どとう  
怒濤。

しらあわ  
白沫。

さっさつと降りしきる雪。目をかすめて飛びかわす雲の霧。自然の大叫喚：：そのまっただ中にたよりなくもみさいなまれる君たちの小さな水船：：やつぱりそれだけだった。

生死の間にさまよって、疲れながらも緊張し切った神経に起こる ハルシネーション 幻覚 だったのだと気がつく、君は急に一種の薄気味

悪さを感じて、力を一度にもぎ取られるように思った。

さきほど奇怪な叫び声を立てたその若い漁夫は、やがて眠るようにおとなしく気を失って、ひよろひよるとよろめくと見る間に、

くずれるように胴の間にぶつ倒れてしまった。

漁夫たちは何か魔でもさしたように思わず極度の不安を目に現わして互いに顔を見合わせた。

「死にはしないぞ」

不思議な事にはそのぶつ倒れた男を見るにつけて、また漁夫たちの不安げな様子を見るにつけて、君は懲りずまに薄気味悪くそう思いつづけた。

君たちがほんとうに一艘そうの友船と出くわしたまでには、どれほどの時間がたっていたろう。しかしとにかく運命は君たちには無関心ではなかったと見える。急に十倍も力を回復したように見えた漁夫たちが、必死になって君たちの船とその船をつなぎ合わ

せ、半分がた凍ってしまった帆を形ばかりに張り上げて、風の追うままに船を走らせた時には、なんとも言えない幸福な感謝の心が、おさえてもおさえてもむらむらと胸の先にこみ上げて来た。

着く所に着いてから思い存分の手当をするからしばらく我慢してくれと心の中にわびるように言いながら、君は若い漁夫を卒倒したまま胴の間の片すみに抱きよせて、すぐ自分の仕事にかかった。

やがて行く手の波の上にぼんやりと雷電峠の突角が現われ出した。やまあし山脚は海の中に、山頂は雲の中に、山腹は雪の中にもみもまれながら、決して動かないものが始めて君たちの前に現われたのだ。それを見つけた時の漁夫たちの心の勇み：：魚が水にあ

つたような、野獣が山に放たれたような、太陽が西を見つげ出したようなその喜び：：船の中の人たちは思わず足爪つまだ立てんばかりに総立ちになった。人々の心までが総立ちになった。

「峠が見えたぞ：：北に取れや舵かじを：：隠れ岩さ乗り上げんな：  
：雪崩だれにも打たせんなよう：：」

そう言う声がかんでんに人々の口からわめかれた。それにしても船はひどく流されていたものだ。雷電峠から五里も離れた瀬にいたものが、いつのまにかこんな所に来ているのだ。見る見る風と波とに押しやられて船は吸い付けられるように、吹雪ふぶきの間からまつ黒に天までそそり立つ断崖だんがいに近寄って行くのを、漁夫たちはそうはさせまいと、帆をたて直し、艀ろを押し、横波を食わせ

ながら船を北へと向けて行つた。

陸地に近づくと波はなお怒る。たてがみ鬣を風になびかして暴れる野馬

のように、波頭は波の穂になり、波の穂は飛沫ひまつになり、飛沫はしぶきになり、しぶきは霧になり、霧はまたまつ白い波になつて、息もつかせずあとからあとからと山すそこに襲いかかつて行く。山すその岩壁に打ちつけた波は、煮えくりかえつた熱湯をぶちつけたように、湯げのような白沫しらあわを五丈も六丈も高く飛ばして、反そりを打ちながら海の中にどつとくずれ込む。

その猛烈な力を感じてか、断崖だんがいの出鼻に降り積もつて、徐々に斜面をすべり下つて来ていた積雪が、地面との縁えんから離れて、すさまじい地響きとともに、何百丈の高さから一気になだれ落ち

る。いただき巔を離れた時には一握りの銀末に過ぎない。それが見る見る大きさを増して、隕いんせい星のように白い尾を長く引きながら、音も立てずにまっしぐらに落として来る。あなやと思う間にそれは何十里にもわたる水晶の大おおすだれ簾だ。ど、ど、どどしーん：：：さあーつ：：。広い海面が目の前でまっ白な平野になる。山のようないおえ五百重の大波はたちまちおい退けられて漣さざなみ一つ立たない。どつとそこを目がけて狂風が四方から吹き起こる：：：その物すさまじさ。

君たちの船は悪鬼におい迫られたようにおびえながら、懸命に東北へと舵かじを取る。磁石のような陸地の吸引力からようよう自由になる事のできた船は、また揺れ動く波の山と戦わねばならぬ。

それでも岩内の港が波の間に隠れたり見えたりし始めると、漁夫たちの力は急に五倍にも十倍にもなった。今までの人数の二倍も乗っているように船は動いた。岸から打ち上げる目標の烽火のろしが紫だつて暗黒な空の中でぽつとはじけると、  
さんさん  
々として火花を散らしながら闇やみの中に消えて行く。それを目かけて漁夫たちは有る限りの艀ろを黙つたままでひた漕こぎに漕いだ。その不思議な沈黙が、互いに呼びかわす惨むごたらしい叫び声よりもかえつて力強く人々の胸に響いた。

船が波の上に乗った時には、波打ちぎわに集まつて何か騒ぎ立っている群衆が見やられるまでになつた。やがてあらしの間にも大砲のような音が船まで聞こえて来た。と思うと  
きゆうじよなわ  
救助繩きゆうじよなわが空

をかける蛇へびのように曲がりくねりながら、船から二三段隔たった水の中にざぶりと落ちた。漁夫たちはそのほうへ船を向けようとひしめいた。第二の爆声が聞こえた。縄はあやまたず船に届いた。二三人の漁夫がよろけころびながらその縄のほうへ駆け寄った。音は聞こえずに烽火のろしの火花は間を置いて怪火のようにはるかの空にぱつと咲いてはすぐ散つて行く。

船は縄に引かれてぐんぐん陸のほうへ近寄つて行く。水底が浅くなつたために無二無三に乱れ立ち騒ぐ波濤はとうの中を、互いにしつかりしがみ合つた二艘そうの船は、半分がた水の中をくぐりながら、半死のありさまで進んで行つた。

君は始めて気がついたように年老いた君の父上のほうを振り返

つて見た。父上はひざから下を水に浸して舵座かじざにすわったまま、じつと君を見つめていた。今まで絶えず君と君の兄上とを見つめていたのだ。そう思うと君はなんとも言えない骨肉の愛着にきびしく捕えられてしまった。君の目には不覚にも熱い涙が浮かんで来た。君の父上はそれを見た。

「あなたが助かってよござんした」

「お前が助かってよかった」

兩人の目には咄嗟とっさの間にも互いに親しみをこめてこう言い合つた。そしてこのうれしい言葉を語る目から互い互いの目は離れようとしなかった。そうしたままでしばらく過ぎた。

君は満足しきってまた働き始めた。もう目の前には岩内の町が、

きたなく貧しいながらに、君にとってはなつかしい岩内の町が、新しく生まれ出たままのように立ち列つらなっていた。水難救済会の制服を着た人たちが、右往左往に駆け回るありさまもまざまざと目に映った。

なんとも言えない勇ましい新しい力——上げ潮のように、腹のどん底からむらむらとわき出して来る新しい力を感じて、君は「さあ来い」と言わんばかりに、艀ろをひしげるほど押しつかんだ。そして矢声をかけながら漕こぎ始めた。涙があとからあとからと君の頬ほおを伝って流れた。

啞おしのように今まで黙っていたほかの漁夫たちの口からも、やにわに勇ましいかけ声があふれ出て、君の声に応じた。艀はは梭ひのよ

うに波を切り破って激しく働いた。

岸の人たちが呼びおこす声が君たちの耳にもはいるまでになった。と思うと君はだんだん夢の中に引き込まれるようなぼんやりした感じに襲われて来た。

君はもう一度君の父上のほうを見た。父上は舵座にすわっている。しかしその姿は前のように君になんらの迫った感じをひき起こさせなかった。

やがて船底にじやりじやりと砂の触れる音が伝わった。船は滞りなく君が生まれ君が育てられたその土の上に引き上げられた。

「死にはしなかったぞ」

と君は思った。同時に君の目の前は見る見るまっ暗になった。：

：君はそのあとを知らない。

## 七

君は漁夫たちとひぎをならべて、同じ握り飯を口に運びながら、心だけはまるで異邦人のように隔たつてこんなことを思い出す。なんとという真剣なそして険しい漁夫の生活だろう。人間というもののは、生きるためには、いやでも死のそば近くまで行かなければならないのだ。いわば捨て身になって、こつちから死に近づいて、死の油断を見すまして、かっぱらいのように生の一片をひつたくつて逃げて来なければならぬのだ。死は知らんふりをしてそれ

を見やっている。人間は奪い取って来た生をたしなみながらしやぶるけれども、ほどなくその生はまた尽きて行く。そうするとまた死の目の色を見すまして、死のほうにぬすみ足で近寄って行く。ある者は死があまり無頓着むとんじやくそうに見えるので、つい気を許して少し大胆に高慢にふるまおうとする。と鬼一口だ。もうその人は地の上にはいない。ある者は年とともにいくじがなくなつて行つて、死の姿がいよいよ恐ろしく目に映り始める。そしてそれに近寄る冒険を躊躇ちゆうちゆうする。そうすると死はやおら物憂ものうげな腰を上げて、そろそろとその人に近寄つて来る。ガラガラ蛇へびに見こまれた小鳥のように、その人は逃げも得しないですくんでしまう。次の瞬間にその人はもう地の上にはいない。人の生きて行く姿はそ

んなふうにも思いなされる。実際にはかないともなんとも言いようがない。その中にも漁夫の生活の激しさは格別だ。彼らは死に対してけんかをしかけんばかりの切羽せつぱつまった心持ちで出かけて行く。陸の上ではなんとと言っても偽善も弥縫びほうもある程度までは通用する。ある意味では必要であるとさえも考えられる。海の上ではそんな事は薬の足たしにしたくもない。真裸な実力と天運ばかりがすべての漁夫の頼みどころだ。その生活はほんとに悲壮だ。彼らがそれを意識せず、生きるといふ事はすべてこうしたものだときらめをつけて、疑いもせず、不平も言わず、自分のために、自分の養わなければならぬ親や妻や子のために、毎日毎日板子一枚の下は地獄のような境界に身を放なげ出して、せつせと骨身を惜

しまず働く姿はほんとうに悲壯だ。そして惨<sup>みじ</sup>めだ。なんだって人間というものはこんなしがない苦勞をして生きて行かなければならないのだろう。

世の中には、ことに君が少年時代を過ごした都会という所には、毎日毎日安逸な生を食傷するほどむさぼって一生夢のように送っている人もある。都会とは言うまい。だんだんとさびれて行くこの岩内の小さな町にも、二三百万円の富を祖先から受け嗣<sup>つ</sup>いで、おたる小樽には立派な別宅を構えてそこに妾<sup>めかけ</sup>を住まわせ、自分は東京のある高等な学校をとにかくも卒業して、話でもさせればそんなに愚鈍にも見えないくせに、一年じゆうこれと言ってする仕事もなく、退屈をまぎらすための行樂に身を任せて、それでも使い切れ

ない精力の余剰を、富者の贅ぜいたく沢の一つである癩かんしゃく癩くに漏らし  
ているのがある。君はその男をよく知っている。小学校時代には  
教室まで一つだったのだ。それが十年かそこらの年月の間に、二  
人の生活は恐ろしくかけ隔たってしまったのだ。君はそんな人た  
ちを一度でもうらやましいと思つた事はない。その人たちの生活  
の内容のむなしさを想像する充分の力を君は持っている。そして  
彼らが彼らの導くような生活をするのは道理があると合点がゆく。  
金があつて才能が平凡だったら勢いああしてわずかに生の倦けんたい怠  
からのがれるほかはあるまいとひそかに同情さえされぬではない。  
その人たちが生に飽満して暮らすのはそれでいい。しかし君の周  
囲にいる人たちがなぜあんな恐ろしい生死の境の中に生きる事を

僥倖ぎようこう

しななければならない運命にあるのだらう。なぜ彼らはそんな境遇——死ぬ瞬間まで一分の隙すきを見せずすきに身構えていなければならぬような境遇にいなから、なぜ生きようとしなければならぬのだらう。これは君に不思議ななぞのようなこころを起こさせる。ほんとうに生は死よりも不思議だ。

その人たちは他人よそめ眼にはどうしても不幸な人たちと言わなければならぬ。しかし君自身の不幸に比べてみると、はるかに幸福だと君は思い入るのだ。彼らにはとにかくそういう生活をする事がそのまま生きる事なのだ。彼らはきれいさっぱりとあきらめをつけて、そういう生活の中に頭からはまり込んでいる。少しも疑ってはいない。それなのに君は絶えずいらいらして、目前の生活

を疑い、それに安住する事ができないでいる。君は喜んで君の両親のために、君の家の苦しい生活のために、君のがんじょうな力強い肉体と精力とを提供している。君の父上のかりそめの風邪かぜがなおつて、しばらくぶりでいっしょに漁りように出て、夕方になつて家に帰つて来てから、一家がむつまじくちやぶ台のまわりを囲んで、暗い五燭しよくの電燈の下で箸はしを取り上げる時、父上が珍しく木彫のような固い顔に微笑をたたえて、

「今夜ははおまんまがうめえぞ」

と言つて、飯茶わんをちよつと押しいただくように目八分に持ち上げるのを見る時などは、君はなんと言つても心から幸福を感じずにはいられない。君は目前の生活を決して悔やんでゐるわけで

はないのだ。それにも係わらず、君は何かにつけてすぐ暗い心になつてしまふ。

「絵がかきたい」

君は寝ても起きても祈りのようにこの一つの望みを胸の奥深く大事にかきいだしているのだ。その望みをふり捨ててしまえる事なら世の中は簡単なのだ。

恋——互いに思い合つた恋と言ってもこれほどの執着はあり得まいと君自身の心を憐れみ<sup>あわ</sup>悲しみながらつくづくと思う事がある。君の厚い胸の奥からは深いため息が漏れる。

雨の日などに土間にすわりこんで、兄上や妹さんなぞといつしよに、配<sup>はいなわ</sup>繩の繕いをしたりしていると、どうかした拍子にみん

なが仕事に夢中になって、むつまじくかわしていた世間話すら途絶えさして、黙りこんで手先ばかりを忙せわしく働かすような時がある。こういう瞬間に、君は我れにもなく手を休めて、茫然ぼうぜんと夢でも見るように、君の見ておいた山の景色を思い出している事がある。この山とあの山との距へだたりの感じは、界さかいの線をこういう曲線で力強くかきさえすれば、きつといいに違いない、そんな事を一心に思い込んでしまう。そして鋏はさみを持った手の先で、ひとりで想像した曲線をひぎの上に幾度もかいては消し、かいては消ししている。

またある時は沖に出て配繩をたぐり上げるだいな忙せわしい時に、君は板子の上にすわって、二本ならべて立てられたビールびんの

間から縄をたぐり込んで、釣りあげられた明鯛すけそうがびんにせかれるために、針の縁えんを離れて胴の間にぴちぴちはねながら落ちて行くのをじつと見やつている。そしてクリムソンレーキを水に薄く溶かしたよりもつと鮮明な光を持った鱗うろこの色に吸いつけられて、思わずぼんやりと手の働きをやめてしまう。

これらの場合はつと我れに返つた瞬間ほど君を惨みじめにするものはない。居眠りしたのを見つけられでもしたように、君はきよとんと恥ずかしそうにあたりを見回して見る。ある時は兄上や妹さんが、暗まつて行く夕方の光に、なお気ぜわしく目を縄なわによせて、せつせとほつれを解いたり、切れ目をつないだりしている。ある時は漁夫たちが、寒さに手を海老えびのように赤くへし曲げながら、

息せき切つて配はいなわ繩なわをたくし上げている。君は子供のように思わ  
ず耳もとまで赤面する。

「なんとというだらしのない二重生活だ。おれはいつたいおれに与  
えられた運命の生活に男らしく服従する覚悟でいるんじゃないか。  
それだのにまだちっぽけな才能に未練を残して、柄にもない野心  
を捨てかねていると見える。おれはどつちの生活にも真剣にはな  
れないのだ。おれの絵に対する熱心だけから言うと、絵かきにな  
るためには充分すぎるほどなのだが、それだけの才能があるかど  
うかという事になると判断のしようが無くなる。もちろんおれに  
絵のかき方を教えてくれた人もなければ、おれの絵を見てくれる  
人もない。岩内の町でのたった一人の話し相手のKは、おれの絵

を見るたびごとに感心してくれる。そしてどんな苦しみを経ても  
絵かきになれと勧めてくれる。しかしKは第一おれの友だちだし、  
第二に絵がおれ以上にわかるとは思われぬ。Kの言葉はいつでも  
おれを励まし鞭<sup>むち</sup>うってしてくれる。しかしおれはいつでもそのあとに、  
うぬぼれさせられているのではないかという疑いを持たずにはい  
ない。どうすればこの二重生活を突き抜ける事ができるのだろう。  
生まれから言っても、今までの運命から言っても、おれは漁夫で  
一生を終えるのが相当しているらしい。Kもあの気むずかしい父  
のもとで調剤師で一生を送る決心を悲しくもしてしまつたらしい。  
おれから見るとKこそは立派な文学者になれそうな男だけれども、  
Kは誇張なく自分の運命をあきらめている。悲しくもあきらめて

いる。待てよ、悲しいというのはほんとうはKの事ではない。そう思っているおれ自身の事だ。おれはほんとうに悲しい男だ。親お父やじにも済まない。兄や妹にも済まない。この一生をどんなふうに過ごしたらおれはほんとうにおれらしい生き方ができるのだろうか」

そこに居ならんだ漁夫たちの間に、どつしりと男らしいがんじようなあぐらを組みながら、君は彼らとは全く異邦の人のようなさびしい心持ちになって、こんなことを思いつづける。

やがて漁夫たちはそこらを片付けてやおおら立ち上がると、胴の間に降り積んだ雪を摘まんで、手のひらでこす擦り合わせて、指に粘りついた飯粒を落とした。そして配はいなわ縄の引き上げにかかった。

西うすずに春きだすと日あしはどんどん歩みを早める。おまけに上の

ほうからたるみなく吹き落として来る風に、海面は妙に弾力を持つた風なぎ方をして、その上を霰あられまじりの粉雪がさーと来ては過ぎ、過ぎては来る。君たちは手袋を脱ぎ去った手をまっかにしながら、氷点以下の水でぐっしよりぬれた配繩をその一端からたぐり上げ始める。三間四間置きぐらいに、目の下二尺もあるような鱈たらがぴちぴちはねながら引き上げられて来る。

三十町に余るくらいな配繩をすっかりたくしこんでしまうころには、海の上は少し墨ぼくじゆう汁を加えた牛乳のようにぼんやり暮れ残つて、そこらにながめやられる漁船のあるものは、帆を張り上げて港を目ざしていたり、あるものはさびしい掛け声をなお海の上に響かせて、忙せわしく配繩はいなわを上げているのもある。夕暮れに海

上に点々と浮かんだ小船を見渡すのは悲しいものだ。そこには人間の生活がそのはかない末梢まつしようをさびしくさらしているのだ。

君たちの船は、海風が凧なぎて陸風に変わらないうちにと帆を立て、艀ろを押して陸地を目がける。晴れては曇る雪時雨ゆきしぐれの間に、

岩内いわないの後ろにそびえる山々が、高いのから先に、水平線上に現

われ出る。船歌をうたいつれながら、漁夫たちは見慣れた山々の頂をつなぎ合わせて、港のありかをそれとおぼろげながら見定める。そこには妻や母や娘らが、寒い浜風に吹きさらされながら、うわさとりどりに汀みぎわに立って君たちの帰りを待ちわびているのだ。

これも牛乳のような色の寒い夕靄ゆうもやに包まれた雷電峠の突角とつさきがいかつく大きく見えだすと、防波堤の突先とつさきにある灯台の灯ひが明

滅して船路を照らし始める。毎日の事ではあるけれども、それを見ると、君と言わず人々の胸の中には、きょうもまず命は無事だったという底深い喜びがひとりでにわき出して来て、陸に対する不思議なノスタルジヤが感ぜられる。漁夫たちの船歌は一段と勇ましくなつて、君の父上は船の艫ともに漁獲を知らせる旗を揚げる。

その旗がばたばたと風にあおられて音を立てる——その音がいい。だんだん間近になつた岩内の町は、黄色い街灯の灯ひのほかには、まだ灯火もともさずに黒くさびしく横たわっている。雪のむら消えた砂浜には、けさと同様に女たちがかきここにいくつかの固い群れになつて、石ころのようにこちんと立っている。白波がすすかな潮の香と音をたてて、その足もとに行つては消え、行つ

ては消えするのが見え渡る。

帆がおろされた。船は海岸近くの波に激しく動揺しながら、艦を海岸のほうに向けかえてだんだんと汀みぎわに近寄って行く。海産物会社の印しるし絆ばんてん天を着たり、犬の皮か何かを裏につけた外がい套とうを深々と羽織ったりした男たちが、右往左往に走りまわるそのあたりを目がけて、君の兄上が手慣れたさばきでさつと艦ともづな綱なを投げると、それがすぐ幾十人も男女の手で引っぱられる。船はしきりと上下する舳へさきに波のしぶきを食いながら、どんどん砂浜に近寄って、やがて疲れ切った魚のように黒く横たわって動かなくなる。漁夫たちは艦ろや舵かじや帆の始末を簡単にしてしまうと、舷ふなべりを伝わって陸におどり上がる。海産物製造会社の人夫たちは、漁夫たち

と入れ替わつて、船の中に猿ましらのように飛び込んで行く。そしてまだ死に切らない鱈たらの尾をつかんで、礫こいしのように砂の上にほうり出す。浜に待ち構えている男たちは、目にもとまらない早わざで数を数えながら、魚を畚もっこの中にたたき込む。漁夫たちは吉例のように会社の数取り人かずとに対して何かと故障を言いたててわめく。一日ひっそりかんとしていた浜も、このしばらくの間だけは、さすがににぎやかな気分になる。景氣にまき込まれて、女たちの或ある者まで男といつしよになつてけんか腰に物を言いつのる。

しかしこのはなばなしにぎわいも長い間ではない。命をなげ出さんばかりの険しい一日の労働の結果は、わずか十数分の間でたわいもなく会社の人たちに処分されてしまうのだ。君が君の妹

を女たちの群れの中から見つけ出して、忙せわしく目を見かわし、言葉をかわず暇もなく、浜の上には乱暴に踏み荒された砂と、海かいそ藻うと小魚とが砂まみれになって残っているばかりだ。そして会社の人夫たちはあとをも見ずにまた他の漁船のほうへ走って行く。こうして岩内じゅうの漁夫たちが一生懸命に捕獲して来た魚はまたたくうちにさらわれてしまつて、墨のように煙突から煙を吐く怪物のような会社の製造所へと運ばれて行く。

夕焼けもなく日はとつぷりと暮れて、雪は紫に、灯ひは光なくただ赤くばかり見える初夜になる。君たちはけさのとおりに幾かたまりの黒い影になつて、疲れ切つた五体をめいめいの家路に運んで行く。寒気のために五臓まで締めつけられたような君たちは口

をきくのさえ物憎ものうくてできない。女たちがはしやいだ調子で、その日のうちに陸の上で起こったいろいろな出来事——いろいろな出来事と言つても、きわだつて珍しい事やおもしろい事は一つもない——を話し立てるのを、ぶつとり押し黙つたままで聞きながら歩く。しかしそれがなんとという快さだろう。

しかし君の家が近くなるにつれて妙に君の心を脅かし始めるものがある。それは近年引き続いて君の家に起こつた種々な不幸がさせるわざだ。長わづらいの後に夫に先立つた君の母上に始まつて、君の家族の周囲には妙に死というものが執しゅう念うねくつきまつわつて、君の家族の周囲には妙に見えた。君の兄上の初生児も取られていた。汗水が凝り固まつてできたような銀行の貯金は、その銀行が不景気の

あおりを食つて破産したために、水の泡あわになつてしまつた。命とかけがえの漁場が、間違つた防波堤の設計のために、全然役に立たなくなつたのは前にも言つたとおりだ。こらえ性しょうのない人々の寄り集まりなら、身代が朽ち木のようにがっくりと折れ倒れるのはありがちと言わなければならぬ。ただ君の家では父上といい、兄上といい、根こんじょう性ほねつ骨ほねの強い正直な人たちだったので、すべての激しい運命を真正面から受け取つて、骨身を惜しまず働いていたから、曲がつたなりに今日今日を事欠かずに過すごしてきているのだ。しかし君の家を襲つたような運命の圧迫はそこいらじゆうに起こつていた。軒を並べて住みなしていると、どこの家にもそれ相当な生計が立てられているようだけれども、一軒一軒に立ち

入つてみると、このごろの岩内の町には鼻を酸くしなげなければならないような事がそこいらじゆうにまくしあがっていた。ある家は目に立って零落していた。あらしに吹きちぎられた屋根板が、いつまでもそのまままで雨の漏れるに任せた所も少なくない。目鼻立ちのそろつた年ごろの娘が、嫁入つたといううわさもなく姿を消してしまふ家もあつた。立派に家いえがまち框が立ち直つたと思うとその家は代が替わつたりしていた。そろそろと地の中に引きこまれて行くような薄気味の悪い零落の兆候が町全体にどことなく漂っているのだ。

人々は暗々裏にそれに脅かされている。いつどんな事がまくし上がるかもしれぬ——そういう不安は絶えず君たちの心を重苦

しく押しつけた。家から火事を出すと、家から出さないまでも類焼の災難にあうとか、持ち船が沈んでしまふとか、働き盛りの兄上が死病に取りつかれるとか、鯨にしんの群来ぐきがすっかりはずれるとか、ワク船が流されるとか、いろいろに想像されるこれらの不幸の一つだけに出くわしても、君の家にとっては、足腰の立たない打撃となるのだ。疲れた五体を家路に運びながら、そしてばかに建物の大きな割合に、それにふさわない暗い灯ひでそこ知られるまごぶ 榎茸まごぶきの君の生まれた家屋を目の前に見やりながら、君の心は運命に対する疑いのために妙におくれがちになる。

それでも敷居しきいをまたぐと土間のすみの竈かまどには火が暖かい光を放みずあめつて水飴みずあめのようにやわらかく撓しないながら燃えている。どこから

どこまでまつ黒にすすけながら、だだっ広い囲炉裏の間はきちん  
と片付けてあつて、居心よさそうにしつらえてある。嫂あによめや妹の心  
づくしを君はすぐ感じてうれしく思いながら、持って帰った漁具  
——寒さのために凍り果てて、触れ合えば石のように音を立てる  
——をそれぞれの所に始末すると、これもからからと音を立てる  
ほど凍り果てた仕事着を一枚一枚脱いで、竈かまどのあたりに掛けつら  
ねて、ふだん着に着かえる。一日の寒気に凍え切った肉体はすぐ  
熱を吹き出して、顔などはのぼせ上がるほどほかほかして来る。  
ふだん着の軽い暖かさ、一椀わんの熱湯の味のよさ。

小気味のよいほどしたたかゆうげ夕餉を食った漁夫たちが、

「親方さんお休み」

と挨拶あいさつしてぞろぞろ出て行つたあとには、水入らずの家族五人が、囲炉裏の火にまっかに顔を照らし合ひながらさし向かいになる。戸外ではさらさらと音を立てて霰あられまじりの雪が降りつづけている。七時というのにもうその界限かいわいは夜ふけ同様だ。どこの家もしんとして赤子の泣く声が時おり聞こえるばかりだ。ただ遠くの遊郭のほうから、朝寝のできる人たちが寄り集まっているらしい酔狂のさざめきだけがとぎれとぎれに風に送られて伝わってくる。

「おらはあ寝まるぞ」

わずかな晩酌ばんしゃくに昼間の疲労を存分に発して、目をとろんこにした君の父上が、まず囲炉裏のそばに床をとらして横になる。

やがて兄上と嫂あによめとが次の部屋へやに退くと、囲炉裏のそばには、君と君の妹だけが残るのだ。

時が静かにさびしく、しかしむつまじくじりじりと過ぎて行く。  
「寝ずに」

針の手をやめて、君の妹はおとなしく顔を上げながら君に言う。  
「先に寝れ、いいから」

あぐらのひぎの上にスケッチ帳を広げて、と見こう見している君は、振り向きもせず、ぶつきらぼうにそう答える。

「朝げにまた眠いとしてこづき起こされべえに」かたほおと片頬かたほおに笑みえをたたえて妹は君にいたずらしい目を向ける。

「なんの」

「なんのでねえよ、そんだもの見こくつてなんのたしになるべえさ。みんなよつて笑つとるでねえか、※の兄やまぎさんあんこと暇さえあれば見つたくもない絵べえかいて、なんするだべつて」

君は思わず顔をあげる。

「だれが言った」

「だれつて……みんな言つてるだよ」

「お前もか」

「私は言わねえ」

「そうだべえ。それならそれでいいでねえか。わけのわかんねえやつさなんとでも言わせておけばいいだ。これを見たか」

「見たよ。しょうえん……しょうえん 莊園の裏から見た所だなあそれは。山はわし気に

入ったども、雲が黒すぎるでねえか」

「さし出口はおけやい」

そして君たち二人は顔を見合つて溶けるように笑みかわす。寒さはしんしんと背骨まで徹つて、戸外には風の落ちた空を黙つて雪が降り積んでいるらしい。

今度は君が発意する。

「おい寝べえ」

「兄さん先に寝なよ」

「お前寝べし……あしたまた一番に起きるだから……戸締まりはおらがするに」

二人はわざと意趣いしゆに争つてから、妹はどうとう先に寝る事にす

る。君はなお半時間ほどスケッチに見入っていたが、寒さにこらえ切れなくなつてやがて身を起こすと、藁草履わらぞうりを引つかけて土間に降り立ち、竈かまどの火もとを充分に見届け、漁具の整頓せいとんを一わたり注意し、入り口の戸に錠前をおろし、雪の吹きこまぬよう窓のすきまをしつかりと閉じ、そしてまた囲炉裏座に帰つて見ると、ちよろちよろと燃えかすれた根粗朶ねそだの火におぼろに照らされて、君の父上と妹とが炉縁ろふちの二方に寝くるまっているのが物さびしくながめられる。一日一日生命の力から遠ざかつて行く老人と、若々しい生命の力に悩まされしているとさえ見える妹の寝顔は、明滅する炎の前に幻のような不思議な姿を描き出す。この老人の老い先をどんな運命が待っているのだろう。この処女おとめの行く末をどん

な運命が待っているのだろう。未来はすべて暗い。そこではどんな事でも起こりうる。君は二人の寝顔を見つめながらつくづくともう思った。そう思うにつけて、その人たちの行く末については、素直な心で幸あれかしと祈るほかはなかった。人の力というものがこんな厳肅な瞬間にはいちばんたよりなく思われる。

君はスケツチ帳を枕もとに引きよせて、垢じみた床の中にそのままぐり込みながら、氷のような布団の冷たさからだの温みで暖まるまで、まじまじと目を見開いて、君の妹の寝顔を、憐れみとも愛ともつかぬ涙ぐましい心持ちでながめつづける。それは君が妹に対して幼少の時から何かのおりに必ずいだくなつかしい感情だった。

それもやがて疲労の夢が押し包む。

今岩内の町に目ざめているものは、おそらく朝寝坊のできる富  
んだ惰なまけ者と、灯台守とうだいもりと犬ぐらいのものだろう。夜は寒くさ  
びしくふけて行く。

## 八

君、君はこんな私の自分勝手な想像を、私が文学者であるとい  
う事から許してくれるだろうか。私の想像はあとからあとからと  
引き続いてわいて来る。それがあたつていようがあつていま  
が、君は私がこうして筆取るそのもくろみに悪意のない事だけは

信じてくれるだろう。そして無邪気な微笑をもって、私の唯一の生命である空想が勝手次第に育って行くのを見守っていてくれるだろう。私はそれをたよってさらに書き続けて行く。

にしん  
鯨

鯨の漁期——それは北方に住む人の胸にのみしみじみと感ぜられるなつかしい季節の一つだ。この季節になると長く地の上を領していた冬が老いる。——北風も、雪も、囲炉裏も、綿入れも、雪鞋つまぎも、等しく老いる。一片の雲のたたずまいにも、自然のもくろみと予言とを人一倍鋭敏に見て取る漁夫たちの目には、朝夕の空の模様が春めいて来た事をまざまざと思わせる。北西の風が東に回るにつれて、単色に堅く凍りついていた雲が、蒸されるようにもやもやとくずれ出して、淡いながら暖かい色の晴れ雲に変わ

つて行く。朝から風もなく晴れ渡った午後なぞに波打ちぎわに出て見ると、やや緑色を帯びた青空のはるか遠くの地平線高く、幔ま幕まくを真一文字に張ったような雪雲の堆積たいせきに日がさして、まんなくばら色に輝いている。なんという美妙的な美しい色だ。冬はあすこまで遠のいて行つたのだ。そう思うと、不幸を突き抜けて幸福に出あつた人のみを感じる、あの過去に対する寛大な思い出が、ゆるやかに浜に立つ人の胸に流れこむ。五か月の長い厳冬を牛のように忍耐強く辛抱しぬいた北人の心に、もう少しでひねくれた根性にさえなり兼ねた北人の心に、春の約束がほのぼのと恵み深く響き始める。

朝晩の凍しみ方はたいして冬と変わりはない。ぬれた金物がべた

べたと糊のりのように指先に粘りつく事は珍しくない。けれども日が高くなると、さすがにどこか寒さにひびがある。浜べは急に景氣づいて、納屋の中からは大釜おおがまや締しめわく框かまがかつぎ出され、ホツク船やワク船をつとのおおうていた蓆むしろが取りのけられ、旅たび鳥らすといっしよに集まって来た漁夫たちが、綾あやを織るように雪の解けた砂浜を行き違つて目まぐるしい活気を見せ始める。

鱈たらの漁獲がひとまず終わつて、鯧にしんの先駆はしりもまだ群ぐけ来て来ない。海に出て働く人たちはこの間に少しの間息まをつく暇を見いだすのだ。冬の間から一心にねらつていたこの暇に、君はある日朝からふいと家を出る。もちろんふところの中には手慣れたスケツチ帳と一本の鉛筆とを潜まして。

家を出ると往来には漁夫たちや、女でめん（女労働者）や、海産物の仲買といったような人々がにぎやかに浮き浮きして行ったり来たりしている。根雪が氷のように磐いわになって、その上を雪解けの水が、一冬の塵埃じんあいに染まつて、泥炭地でいたんちのわき水のような色でどぶどぶと漂つている。馬櫓ばそりに材木のように大きな生々しい薪まきをしこたま積み載せて、その悪路を引っぱつて来た一人の年配な内儀かみさんは、君を認めると、引き綱をゆるめて腰を延ばしながら、戯れた調子で大きな声をかける。

「はれ兄あにさんもう浜さいくだね」

「うんにや」

「浜でねえ？ たらまた山かい。魚を商売にする人ふとが暇さえあれ

ば山さ突っぱしるだから怪体だあてばさ。いい人でもいるだんべさ。は、は、は、……。うんすら妬いてこすに、一押し手を貸すもんだよ」

「口はばつたい事ベ言うと鰯様が群来てはくんねえぞ。おかしな婆様よなあお前も」

「婆様だ!! 人間きの悪い事ベ言わねえもんだ。人様が笑うでねえか」

実際この内儀さんの噪いだ雑言には往来の人たちがおもしろがつて笑っている。君は当惑して、櫂の後ろに回つて三四間ぐんぐん押してやらなければならなかつた。

「そだ。そだ。兄さんいい力だ。浜まで押してくれたらおらお前

に惚れこすに」

君はあきれて櫂から離れて逃げるように行く手を急ぐ。おもしろがって二人の問答を聞いていた群集は思わず一度にどつと笑いくずれる。人々のその高笑いの声にまじって、内儀さんがまただれかに話しかける大声がのびやかに聞こえて来る。

「春が来るのだ」

君は何につけても好意に満ちた心持ちでこの人たちを思いやる。やがて漁師町をつきぬけて、この市街では目ぬきな町筋に出ると、冬じゆうあき屋になっていた西洋風の二階建ての雨戸が繰りあけられて、札幌さつぽろのある大きなデパートメント・ストアの臨時出店が開かれようとしている。藁屑わらくずや新聞紙のはみ出た大きな

木箱が幾個か店先にほうり出されて、広告のけばけばしい色旗が、活動小屋の前のように立てならべてある。そして気のきいた手代が十人近くも忙し<sup>いそが</sup>そうに働いている。君はこの大きな臨時の店が、岩内じゅうの小売り商人にどれほどの打撃であるかを考えながら、自分たちの漁獲が、資本のないために、ほかの土地から投資された海産物製造会社によつて捨て値で買い取られる無念さをも思わないではいられなかつた。「大きな手にはつかまれる」……そう思いながら君はその店の角を曲<sup>かど</sup>がって割合にさびれた横町にそれた。

その横町を一町も行かない所に一軒の薬種店があつて、それにつづいて小さな調剤所がしつらえてあつた。君はそのこのガラス窓

から中をのぞいて見る。ずらつとならべた薬種びんの下の調剤卓の前に、もたれのない抉くり抜ぬきの事務椅子しむいすに腰かけて、黒い事務マントを羽織ゆううつつた悒鬱ゆううつそうな小柄な若い男が、一心に小形の書物に読みふけている。それはKと言つて、君が岩内の町に持っているただ一人の心の友だ。君はくすんだガラス板に指先を持つて行つてほとほとたたたく。Kは機敏に書物から目をあげてこちらを振りかえる。そして驚いたように座を立てて来てガラス障子をあげる。

「どこに」

君は黙つたまま懐中からスケッチ帳を取り出して見せる。そして二人は互いに理解するようにはほほえみかわす。

「君はきょうは出られまい」

君は東京の遊学時代を記念するために、だいじにとつておいた書生の言葉を使えるのが、この友だちに会う時の一つの楽しみだった。

「だめだ。このごろは漁夫で岩内の人数が急にふえたせいせわか忙しい。しかし今はまだ寒いだろう。手が自由に動くまい」

「なに、絵はかけずとも山を見ていればそれでいいだ。久しく出て見ないから」

「僕は今これを読んでいたが（と言つてKはミケランジェロの書簡集を君の目の前にさし出して見せた）すばらしいもんだ。こうしてはいけなような気がするよ。だけでもとても及びもつ

かない。いかげんな芸術家というものになって納まっているよ  
り、この薄暗い薬局で、黙りこくつて一生を送るほうがやはり僕  
には似合わしいようだ」

そう言つて君の友は、ゆううつ 悒鬱な小柄な顔をひとときわ悒鬱にした。  
君は励ます言葉も慰める言葉も知らなかつた。そして心がめす  
るもののようにスケッチ帳をふところに納めてしまった。

「じや行つて来るよ」

「そうかい。そんなら帰りには寄つて話して行きたまえ」

この言葉を取りかわして、君はその薄よごれたガラス窓から離  
れる。

南へ南へと道を取つて行くと、節婦橋という小さな木橋があつ

て、そこから先にはもう家並みは続いていない。溝泥どぶどろをこね返したような雪道はだんだんきれいになって行つて、地面に近い所が水になってしまった積雪の中に、君の古い兵隊長靴へいたいながぐつはややともするとすぼりすぼりと踏み込んだ。

雪におおわれた野は雷電峠つまさきあのふもとのほうへ爪先つまさきあ上がりに広がつて、おりから晴れ気味になつた雲間を漏れる日の光が、地面の陰ひなたを銀と藍あいとでくつきりといろどつている。寒い空気の中に、雪の照り返しがかつかつと顔をほてらせるほど強くさして来る。君の顔は見る見る雪焼けがしてまっかに汗ばんで来た。今までがなじょうにかぶっていた頭巾ずきんをはねのけると、眼界は急にはるばると広がつて見える。

なんという広大なおごそかな景色だ。胆振いぶりの分水嶺から分かれ  
て西南をさす一連の山波が、地平から力強く伸び上がってだんだ  
ん高くなりながら、岩内の南方へ走って来ると、そこに凶らずも  
陸の果てがあつたので、突然水ぎわに走りよつた奔馬が、そろえ  
た前脚まえあしを踏み立てて、思わず平頸ひらくびを高くそびやかしたように、  
山は急にそそり立って、沸騰せんばかりに天を摩している。今に  
もすさまじい響きを立ててくずれ落ちそうに見えながら、何百万  
年か何千万年か、昔のままの姿でそそり立っている。そして今は  
ただ一色の白さに雪でおおわれている。そして雲が空を動かたび  
ごとに、山は居住まいを直したかのように姿を変える。君は久し  
ぶりで近々とその山をながめるともう有頂天になった。そして余

の事はきれいに忘れてしまう。

君はただいちぢずにながむしやらに本道から道のない積雪の中に足を踏み入れる。行く手に黒ずんで見える楡にれの切り株の所まで腰から下まで雪にまみれてたどり着くと、君はそれに兵隊へいたいながぐつ長靴を打ちつけて足の雪を払い落としながらたたずむ。そして目を据すえてもう一度雪野の果てにそびえ立つ雷電峠を物珍しくながめて魅入られたように茫ぼうぜん然ぜんとなってしまう。幾度見てもあきる事のない山のたたずまいが、この前見た時と相違のあるはずはないのに、全くちがった表情をもって君の目に映って来る。この前見に来た時は、それは厳冬の一日のことだった。やはりきょうと同じ所に立って、凍える手に鉛筆を運ぶ事もできず、黙ったまま立って見

ていたのだったが、その時の山は地面から静々と盛り上がって、雪雲に閉ざされた空を確しかとつかんでいるように見えた。その感じは恐ろしく執念深く力強いものだった。君はその前に立って押しひしゃげられるような威圧を感じた。きよう見る山はもつと素直な大きさと豊かさをもつて静かに君をかきいだくように見えた。ふだん自分の心持ちがだれからも理解されないで、一種の変屈人のように人々から取り扱われていた君には、この自然が君に對して求めて来る親しみはしみじみとしたものだった。君はまたさらに目をあげて、なつかしい友に向かうようにしみじみと山の姿をながめやった。

ちようど親しい心と心とが出あつた時に、互いに感ぜられるよ

うな温あたたかい涙ぐましさ、君の雄々しい胸の中にわき上がって来た。自然は生きている。そして人間以上に強く高い感情を持っている。君には同じ人間の語る言葉だが英語はわからない。自然の語る言葉は英語よりもはるかに君にはわかりいい。ある時には君が使っている日本語そのものよりももっと感情の表現の豊かな平明な言葉で自然が君に話しかける。君はこの涙ぐましい心持ちを描いてみようとした。

そして懐中からいつものスケッチ帳を取り出して切り株の上に置いた。開かれた手帖と山とをかたみがりに見やりながら、君は丹念に鉛筆を削り上げた。そして粗末な画学紙の上には、たくましく荒くれた君の手に似合わない繊細な線が描かれ始めた。

ちょうど人の肖像をかこうとする画家が、その人の耳目鼻口を  
 それぞれ綿密に観察するように、君は山の一つの皺しわ一つの襞ひだにも  
 君だけが理解すると思える意味を見いだそうと努めた。実際君の  
 目には山のすべての面は、そのまますべての表情だった。日光と  
 雲との明キヤロスキュロ暗キヤロスキュロにいろどられた雪の重なりには、熱愛をもつて  
 見きわめようと努める人々にのみ説き明かされる貴たつといなぞが潜め  
 てあった。君は一つのなぞを解き得たと思うごとに、小おどりし  
 たいほどの喜びを感じた。君の周囲には今はもう生活の苦情もな  
 かった。世間に対する不安も不幸もなかった。自分自身に対する  
 おくれがちな疑いもなかった。子供のよくな快活な無邪気な一本  
 気な心……君のくちびるからは知らず知らず軽い口笛が漏れて、

君の手はおどるように調子を取って、紙の上を走ったり、山の大ききさや角度を計ったりした。

そうして幾時間が過ぎたろう。君の前には「時」というものさえなかつた。やがて一つのスケッチができあがつて、軽い満足のため息とともに、働かし続けていた手をとめて、片手にスケッチ帳を取り上げて目の前に据すえた時、君は軽い疲労——軽いと言つても、君が船の中で働く時の半日分の労働の結果よりは軽くない——を感じながら、きょうが仕事のよい収穫であれかしと祈つた。画学紙の上には、吹き変わる風のために乱れがちな雲の間に、その頂を見せたり隠したりしながら、まっ白にそそり立つ峠の姿と、その手前の広い雪の野のここかしこにむら立つ針葉樹の木立ちや、

薄く炊煙を地になびかしてところどころに立つ惨めな農家、これらの間を鋭い刃物で断ち割ったような深い峽間、はざまそれらが特種な深い感じをもつて特種な筆触で描かれている。君はややしばらくそれを見やつてほほえましく思う。久しぶりで自分の隠れた力が、哀れな道具立てによつてではあるが、とにかく形を取つて生まれ出たと思うとうれしいのだ。

しかしながら狐疑こぎは待ちかまえていたように、君が満足の心を充分味わう暇もなく、足もとから押し寄せて来て君を不安にする。君は自分にへつらうものに対して警戒の眼を向ける人のように、自分の満足の心持ちをきびしく調べてかかろうとする。そして今かき上げた絵を容赦なく山の姿とくらべ始める。

自分が満足だと思つたところはどこにあるのだろう。それはいわば自然の影絵に過ぎないではないか。向こうに見える山はそのまま寛大と希望とを象徴するような一つの生きた塊的マッスであるのに、君のスケッチ帳に縮め込まれた同じものの姿は、なんの表情も持たない線と面との集まりとより君の目には見えない。

この悲しい事実を発見すると君は躍起となつて次のページをまくる。そして自分の心持ちをひとときわ謙けん遜そんな、そして執着の強いものにし、粘り強い根気でどうかして山をそのまま君の画帖がじょうの中に生かし込もうとする、新たな努力が始まると、君はまたすべての事を忘れ果てて一心不乱に仕事の中に魂を打ち込んで行く。そして君が昼弁当を食う事も忘れて、四枚も五枚ものスケッチを

作つた時には、もうだいぶ日は傾いている。

しかしとてもそこを立ち去る事はできないほど、自然は絶えず美しくよみがえつて行く。朝の山には朝の命が、昼の山には昼の命があつた。夕方の山にはまたしめやかな夕方の山の命がある。山の姿は、その線と陰かげひなた日向とばかりでなく、色彩にかけても、日が西に回るとすばらしい魔術のような不思議を現わした。峠のある部分は鋼鉄のように寒くかたく、また他の部分は気化した色素のように透明で消えうせそうだ。夕方に近づくとつれて、やや煙り始めた空気の中に、声も立てずに肅然とそびえているその姿には、くんでもくんでも尽きない平明な神秘が宿っている。見ると山の八合目と覺しい空高く、小さな黒い点が静かに動いて輪を

描いている。それは一羽の大鷲おおわしに違いない。目を定めてよく見ると、長く伸ばした両の翼を微塵みじんも動かさずに、からだ全体をやや斜めにして、大きな水の渦うずに乗った枯れ葉のように、その鷲は静かに伸びやかに輪を造っている。山が物言わんばかりに生きてると見える君の目には、この生物はかえって死物のように思いなされる。ましてや平原のところどころに散在する百姓家などは、山が人に与える生命の感じにくらべれば、惨めみじな幾個かの無機物に過ぎない。

昼は真冬からは著しく延びてはいるけれども、もう夕暮れの色はどんどん催して来た。それとともに肌身はだみに寒さも加わって来た。落日にいろどられて光を呼吸するように見えた雲も、煙のような

白と淡<sup>うすあ</sup>藍<sup>い</sup>との陰日向を見せて、雲とともに大空の半分を領していた山も、見る見る寒い色に堅くあせて行つた。そして靄<sup>もや</sup>とも言ふべき薄い膜<sup>まく</sup>が君と自然との間を隔てはじめた。

君は思わずため息をついた。言い解きがたい暗愁——それは若い人が恋人を思う時に、その恋が幸福であるにもかかわらず、胸の奥に感ぜられるような——が不思議に君を涙ぐましくした。君は鼻をすすりながら、ばたんと音を立ててスケツチ帳を閉じて、鉛筆といつしよにそれをふところに納めた。凍<sup>い</sup>てた手はふところの中の温<sup>ぬく</sup>みをなつかしく感じた。弁当は食う気がしないで、切り株の上からそのまま取つて腰にぶらさげた。半日立ち尽くした足は、動かそうとすると電気をかけられたようにしびれていた。よ

うようの事で君は雪の中から爪つまさき先をぬいて一歩一歩本道のほうへ帰って行った。はるか向こうを見ると山から木材や薪炭しんたんを積みおろして来た馬ば籠そりがちらほらと動いていて、馬の首につけられた鈴の音がさえた響きをたててかすかに聞こえて来る。それは漂浪の人がはるかに故郷の空を望んだ時のようなつかしい感じを与える。その消え入るような、さびしい、さえた音がことになつかしい。不思議な誘惑の世界から突然現世に帰った人のように、君の心はまだ夢ごちで、芸術の世界と現実の世界との淡々しい境界線をたどっているのだ。そして君は歩きつづける。

いつのまにか君は町に帰って例の調剤所の小さな部屋へやで、友だちのKと向き合っている。Kは君のスケッチ帳を興奮した目つき

でかしここに見返している。

「寒かったろう」

とKが言う。君はまだほんとうに自分に帰り切らないような顔つきで、

「うむ。：：寒くはなかった。：：その線の鈍っているのは寒かったからではないんだ」と答える。

「鈍ってはいはしない。君がすっかり何もかも忘れてしまつて、駆けまわるように鉛筆をつかつた様子がよく見えるよ。きょうのはみんな非常に僕の気に入ったよ。君も少しは満足したろう」

「実際の山の形にくらべて見たまえ。……僕は親父おやじにも兄貴にもすまない」

と君は急いで言いわけをする。

「なんで？」

Kはげんそうにスケッチ帳から目を上げて君の顔をしげしげと見守る。

君の心の中には苦にがい灰汁あくじるのようなものがわき出て来るのだ。漁にこそ出ないが、ほんとうを言うと、漁夫の家には一日として安閑としていい日とてはないのだ。きょうも、君が一日を絵に暮らしていた間に、君の家では家じゆうで忙いそがしく働いていたのに違いないのだ。建たて網あみに損じの有る無し、網をおろす場所の海底の

模様、大釜おおがまを据すえるべき位置、棧橋さんばしの改造、薪炭しんたんの買い入れ、米塩の運搬、仲買人との契約、肥料会社との交渉：：そのほかにしんりよう鱧にしんりようの始まる前に漁場の持ち主がしておかなければならない事は有り余るほどあるのだ。

君は自分が絵に親しむ事を道楽だとは思っていない。いないどころか、君にとってはそれは、生活よりもさらに厳粛な仕事であるのだ。しかし自然と抱き合い、自然を絵の上に生かすという事は、君の住む所では君一人だけが知っている喜びであり悲しみであるのだ。ほかの人たちは——君の父上でも、兄きょうだい妹いでも、隣近所の人でも——ただ不思議な子供じみた戯れとよりそれを見えないのだ。君の考えどおりをその人たちの頭の中にたんのうが

できるように打ちこむというのは思いも及ばぬ事だ。

君は理屈ではなんら恥ずべき事がないと思っっている。しかし実際では決してそうは行かない。芸術の神聖を信じ、芸術が実生活の上に玉座を占むべきものであるのを疑わない君も、その事だけが君自身に関係して来ると、思わず知らず足もとがぐらついて来るのだ。

「おれが芸術家でありうる自信さえできれば、おれは一刻の躊躇ちゆうもなく実生活を踏みにじつても、親しいものを犠牲にしても、歩み出す方向に歩み出すのだが：家の者どもの実生活の真剣さを見ると、おれは自分の天才をそうやすやすと信ずる事ができなくなってしまうんだ。おれのようなものをかいていながら彼らに

芸術家顔をする事が恐ろしいばかりでなく、僭せんえつ越な事に考えられる。おれはこんな自分が恨めしい、そして恐ろしい。みんなはあれほど心から満足して今日今日を暮らしているのに、おれだけはまるで陰謀でもたくらんでいるように始終暗い心をしていなければならぬのだ。どうすればこの苦しきこのさびしきから救われるのだろうか」

平常のこの考えがKと向かい合っても頭から離れないので、君は思わず「親父おやじにも兄貴にもすまない」と言ってしまったのだ。

「どうして？」と言ったKも、君もそのまま黙ってしまった。Kには、物を言われなくても、君の心はよくわかっていたし、君はまた君で、自分はきれいにあきらめながらどこまでも君を芸術の

捧<sup>ほう</sup>誓<sup>せい</sup>者<sup>しゃ</sup>たらしめたいと熱望する、Kのさびしい、自己を滅した、  
 温<sup>あたた</sup>かい心の働きをしつくりと感じていたからだ。

君ら二人の目は悒<sup>ゆう</sup>鬱<sup>うつ</sup>な熱に輝きながら、互いに瞳<sup>ひとみ</sup>を合わすの  
 をはばかるように、やや燃えかすれたストーブの火をながめ入る。  
 そうやって黙っているうちに君はたまらないほどさびしくなっ  
 て来る。自分を憐<sup>あわ</sup>れむともKを憐<sup>あわ</sup>れむとも知れない哀情がこみ上  
 げて、Kの手を取り上げてなでてみたい衝動を幾度も感じながら、  
 女<sup>め</sup>々<sup>め</sup>しさを退けるようにむずかゆい手を腕の所で堅く組む。

ふとすすけた天井からたれ下がった電球が光を放った。驚いて  
 窓から見るともう往来はまっ暗になつてゐる。冬の日の春<sup>うす</sup>き隠<sup>す</sup>れ  
 る早さを今さらに君はしみじみと思つた。掃除<sup>そうじ</sup>の行き届かない電

球はごみと手あかとでことさら暗かった。それが部屋へやの中をなお  
悒鬱ゆううつにして見せる。

「飯だぞ」

Kの父の荒々しいかん走った声が店のほうからいかにもつっけ  
んどんに聞こえて来る。ふだんから自分の一人むすこの悪友でも  
あるかのごとく思いなして、君が行くとかつてきげんのいい顔を  
見せた事のないその父らしい声だった。Kはちよつと反抗するよ  
うな顔つきをしたが、陰性なその表情をますます陰性にしただけ  
で、きばきばと盾たてをつく様子もなく、父の心と君の心とをうかが  
うように声のするほうと君のほうとを等分に見る。

君は長座をしたのがKの父の気にさわったのだと推すると座を

立とうとした。しかしKはそういう心持ちに君をしたのを非常に物足らなく思つたらしく、君にもぜひ夕食をいっしょにしよと勧めてやまなかつた。

「じゃ僕は昼の弁当を食わずにここに持つてるからここで食おうよ。遠慮なく済まして来たまえ」

と君は言わなければならなかつた。

Kは夕食を君に勧めながら、ほんとうはそれを両親に打ち出して言う事を非常に苦にしていたらしく、さればとてまずい心持ちで君をかえすのも堪えられないと思いなやんでいたらしかつたので、君の言葉を聞くと活路を見いだしたように少し顔を晴れ晴れさせて調剤室を立つて行つた。それも思えば一家の貧窮がKの心

に染み渡わたつたしるしだった。君はひとりになると、だんだん暗い心になりまさるばかりだった。

それでも夕飯という声を聞き、戸のすきから漏れる焼きぎかなのにおいをかぐと、君は急に空腹を感じだした。そして腰に結び下げた弁当包みを解いてストープに寄り添いながら、椅子いすに腰かけたままのひぎの上でそれを開いた。

北海道には竹がないので、竹の皮の代わりにへぎで包んだ大きな握り飯はすっかり凍いてしまっている。春立はるだった時節とは言いながら一日寒空に、切り株の上にさらされていたので、飯粒は一粒一粒ぼろぼろに固くなつて、持った手の中からこぼれ落ちる。試みに口に持って行ってみると米の持つうまみはすっかり奪われ

ていて、無味な繊維のかたまりのような触覚だけが冷たく舌に伝わって来る。

君の目からは突然、君自身にも思いもかけなかった熱い涙がほろほろとあふれ出た。じつとすわったままではいられないような寂寥せきりようの念がまつ暗に胸中に広がった。

君はそつと座を立った。そして弁当を元どおりに包んで腰にさげ、スケッチ帳をふところ<sup>ながぐつ</sup>にねじこむと、こそそそと入り口に行つて長靴ながぐつをはいた。靴の皮は夕方の寒さに凍こおつて、鉄板のように堅く冷たかつた。

雪は燐りんのようなかすかな光を放つて、まつ黒に暮れ果てた家々の屋根をおおうていた。さびしいこの横町は人の影も見せなかつ

た。しばらく歩いて例のデパートメント・ストアの出店の角近くかどに来ると、一人の男の子がスケート下駄げた（下駄の底にスケートの歯をすげたもの）をはいて、でこぼこに凍った道の上をがりがりと音をさせながら走って来た。その子はスケートに夢中になって、君のそばをすりぬけても君には気がついていないらしい。

「氷の上がすべれだした時はほんとに夢中になるものだ」

君は自分の遠い過去をのぞき込むようにさびしい心の中にもこう思う。何事を見るにつけても君の心は痛んだ。

デパートメント・ストアのある本通りに出ると打って変わってにぎやかだった。電灯も急に明るくなったように両側の家を照らして、そこには店の者と購買者との影が綾あやを織った。それは君に

とつては、その場合の君にとつては、一つ一つ見知らぬものばかりのようだった。そこいらから起こる人声や荷櫓にぞりの雑音などがぴんぴんと君の頭を針のように刺激する。見物の前に引き出された見世物小屋の野獣のようないらだたしさを感じて、君は眉根まゆねの所に電光のように起こる痙攣けいれんを小うるさく思いながら、むずかしい顔をしてさつさとにぎやかな往来を突きぬけて漁師町りようしまちのほうへ急ぐ。

しかし君の家が見えだすと君の足はひとりでにゆるみがちになつて、君の頭は知らず知らず、なお低くうなだれてしまった。そして君は疑わしそうな目を時々上げて、見知り越しの顔にでもあいはしないかと気づかった。しかしこの界隈かいわいはもう静まり返つ

ていた。

「だめだ」

突然君はこう小さく言つて往来のまん中に立ちどまつてしまつた。そうして立ちすくんだその姿の首から肩、肩から背中に流れる線は、もしそこに見守る人がいたならば、思わずぞつとして異常な憂愁と力とを感ずるに違いない不思議に強い表現を持つていた。

しばらく釘づけくぎにされたように立ちすくんでいた君は、やがて自分自身をもぎ取るように決然と肩をそびやかして歩きだす。

君は自分でもどこをどう歩いたか知らない。やがて君が自分に気がついて君自身を見いだした所は海産物製造会社の裏の険しい

岨がけを登りつめた小山の上の平地だった。

全く夜になってしまっていた。冬は老いて春は来ない——その壊れ果てたような荒涼たる地の上高く、寒さをかすかな光にしたような雲のない空が、息もつかずに、凝然として延び広がっていた。いろいろな光度といろいろな光彩でちりばめられた無数の星々の間に、冬の空の誇りなる参オライオン宿が、微妙な傾斜をもつて三つならんで、何かの凶徴のようにひときわぎらぎらと光っていた。星は語らない。ただはるかな山すそから、干潮になった無月の潮し騒おざいが、海妖かいようの単調な誘惑の歌のように、なまめかしくなでるように聞こえて来るばかりだ。風が落ちたので、凍りついたように寒く沈み切った空気は、この海のささやきのために鈍く震えて

いる。

君はその平地の上に立つてぼんやりあたりを見回していた。君の心の中にはさきほどから恐ろしい企たくらみ図が目ざめていたのだ。

それはきように始まった事ではない。ともすれば君の油断を見すまして、泥沼どろぬまの中からぬるりと頭を出す水の精のように、その

企図は心の底から現われ出るのだ。君はそれを極端に恐れもし、憎みもし、卑しみもした。男と生まれながら、そんな誘惑を感じずる事さえやくざな事だと思つた。しかしいつたんその企図が頭をもたげたが最後、君は魅入られた者のように、もがき苦しみながらも、じりじりとそれを成就するためには、すべてを犠牲にしても悔いしないような心になつて行くのだ、その恐ろしい企たくらみ図とは

自殺する事なのだ。

君の心は妙にしんと底冷えがしたようにとげとげしく澄み切つて、君の目に映る外界の姿は突然全く表情を失つてしまつて、固い、冷たい、無慈悲な物の積み重なりに過ぎなかつた。無際限なただ一つの荒廃——その中に君だけが呼吸を続けている、それがたまらぬほどさびしく恐ろしい事に思いなされる荒廃が君の上下四方に広がっている。波の音も星のまたたきも、夢の中の出来事のように、君の知覚の遠い遠い末梢まつしように、感ぜられるともなく感ぜられるばかりだった。すべての現象がてんでんばらばらに互いの連絡なく散らばつてしまつた。その中で君の心だけが張りつめて死のほうへとじりじり深まつて行こうとした。重錘おもりをかけて

深い井戸に投げ込まれた灯明のように、深みに行くほど、君の心は光を増しながら、感じを強めながら、最後には死というその冷たい水の表面に消えてしまおうとしているのだ。

君の頭がしびれて行くのか、世界がしびれて行くのか、ほんとうにわからなかった。恐ろしい境界に臨んでいるのだと幾度も自分を警めながら、君は平気な気持ちでとてつもないのんきな事を考えたりしていた。そして君は夜のふけて行くのも、寒さの募るのも忘れてしまって、そろそろと山鼻のほうへ歩いて行った。

足の下遠く黒い岩浜が見えて波の遠音が響いて来る。

ただ一飛びだ。それで煩悶はんもんも疑惑もきれいさっぱり帳消しになるのだ。

「家の者たちはほんとうに気が違つてしまつたとても思うだろう。

……頭が先にくだけるかしらん。足が先に折れるかしらん」

君はまたたきもせずにはぼんやり崖の下をのぞきこみながら、他人の事でも考えるように、そう心の中でつぶやく。

不思議なしびれはどんどん深まつて行く。波の音なども少しずつかすかになつて、耳にはいつたりはいらなかつたりする。君の心はただいぢらずに、眠り足りない人が思わず瞼をふさぐように、崖の底を目がけてまろび落ちようとする。あぶない……あぶない……他人の事のように思いながら、君の心は君の肉体を崖のきわからまつさかさまに突き落とそうとする。

突然君ははね返されたように正気に帰つて後ろに飛びすぎつた。

耳をつんざくような鋭い音響が君の神経をわななかしめたからだ。

ぎよつと驚いて今さらのように大きく目を見張った君の前には平地から突然下方に折れ曲がった崖の縁が、地球の傷口のように底深い口をあけている。そこに知らず知らず近づいて行きつつあった自分を省みて、君は本能的に身の毛をよだてながら正気になった。

鋭い音響は目の下の海産物製造会社の汽笛だった。十二時の交代時間になっていたのだ。遠い山のほうからその汽笛の音はかすかに反響こだまになって、二重にも三重にも聞こえて来た。

もう自然はもとの自然だった。いつのまにか元どおりな崩壊したようなさびしい表情に満たされて涯はてもなく君の周囲に広がって

いた。君はそれを感じると、ひたと底のない寂寥せきりようの念に襲われだした。男らしい君の胸をぎゅつと引きしめるようにして、熱い涙がとめどなく流れ始めた。君はただひとり真夜中の暗やみの中にすすり上げながら、まっ白に積んだ雪の上にうずくまってしまった、立ち続ける力さえ失ってしまった。

## 九

君よ!!

この上君の内部生活を忖度そんたくしたり揣摩しましたりするのは僕のものではない。それは不可能であるばかりでなく、君を

読けがすと同時に僕自身を読けがす事だ。君の談話や手紙を総合した僕のこれまでの想像は謬あやまっていない事を僕に信ぜしめる。しかし僕はこの上の想像を避けよう。ともかく君はかかる内部の葛かっとう藤とうの激しさに堪えかねて、去年の十月にあのスケッチ帳と真率な手紙とを僕に送つてよこしたのだ。

君よ。しかし僕は君のために何をなす事ができようぞ。君とお会いした時も、君のような人が——全然都会の臭味から免疫されて、過敏な神経や過量な人為的知見にわずらわされず、強健な意力と、強きょう韌じんな感情と、自然に哺はぐくまれた叡えいち智ちとをもつて自然を端的に見る事のできる君のような土の子が——芸術の捧ほう誓せい者しゃとなつてくれるのをどれほど望んだらう。けれども僕の喉のどまで出そ

うになる言葉をしいておさえて、すべてをなげうって芸術家になつたらいいだろうとは君に勧めなかつた。

それを君に勧めるものは君自身ばかりだ。君がただひとりで忍ばなければならぬ煩悶はんもん——それは痛ましい陣痛の苦しみであるとは言え、それは君自身の苦しみ、君自身で癒いさなければならぬ苦しみだ。

地球の北端——そこでは人の生活が、荒くれた自然の威力に压倒されて、瘦地やせじにおとされた雑草の種のように弱々しく頭をもたげてい、人類の活動の中心からは見のがされるほど隔たつた地球の北端の一つの地角に、今、一つのすぐれた魂は悩んでいるのだ。もし僕がこの小さな記録を公にしなかつたならばだれもこのすぐ

れた魂の悩みを知るものはないだろう。それを思うとすべての現象は恐ろしい神秘に包まれて見える。いかなる結果をもたらすかもしれない恐ろしい原因は地球のどのすみっこにも隠されているのだ。人はおそれないではいられない。

君が一人の漁夫として一生をすごすのがいいのか、一人の芸術家として終身働くのがいいのか、僕は知らない。それを軽々しく言うのはあまりに恐ろしい事だ。それは神から直接君に示されなければならぬ。僕はその時が君の上に一刻も早く来るのを祈るばかりだ。

そして僕は、同時に、この地球の上のそこそこに君と同じ疑問いと悩みとを持って苦しんでいる人々の上に最上の道が開けよか

しと祈るものだ。このせつなる祈りの心は君の身の上を知るようになつてから僕の心の中にことに激しく強まつた。

ほんとうに地球は生きている。生きて呼吸している。この地球の生まんとする悩み、この地球の胸の中に隠れて生まれ出ようとするものの悩み——それを僕はしみじみと君によつて感ずる事ができる。それはわきいでおど跳り上がる強い力の感じをもつて僕を涙ぐませる。

君よ！ 今は東京の冬も過ぎて、梅が咲きつばき椿が咲くようになつた。太陽の生み出す慈愛の光を、地面は胸を張り広げて吸い込んでいる。春が来るのだ。

君よ、春が来るのだ。冬の後には春が来るのだ。君の上にも確

かに、正しく、力強く、永久の春がほほえめよかし……僕はただ  
そう心から祈る。

(一九一八年四月、大阪毎日新聞に一部所載)

## 青空文庫情報

底本：「小さき者へ・生まれいずる悩み」岩波文庫、岩波書店

1940（昭和15）年3月26日第1刷発行

1962（昭和37）年10月16日第26刷改版発行

1998（平成10）年4月6日第71刷改版発行

底本の親本：「生れ出る悩み」叢文閣

1918（大正7）年9月初版発行

入力：土田一柄

校正：丹羽倫子

2000年10月10日公開

2012年8月21日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 生まれいずる悩み

有島武郎

2020年 7月12日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>